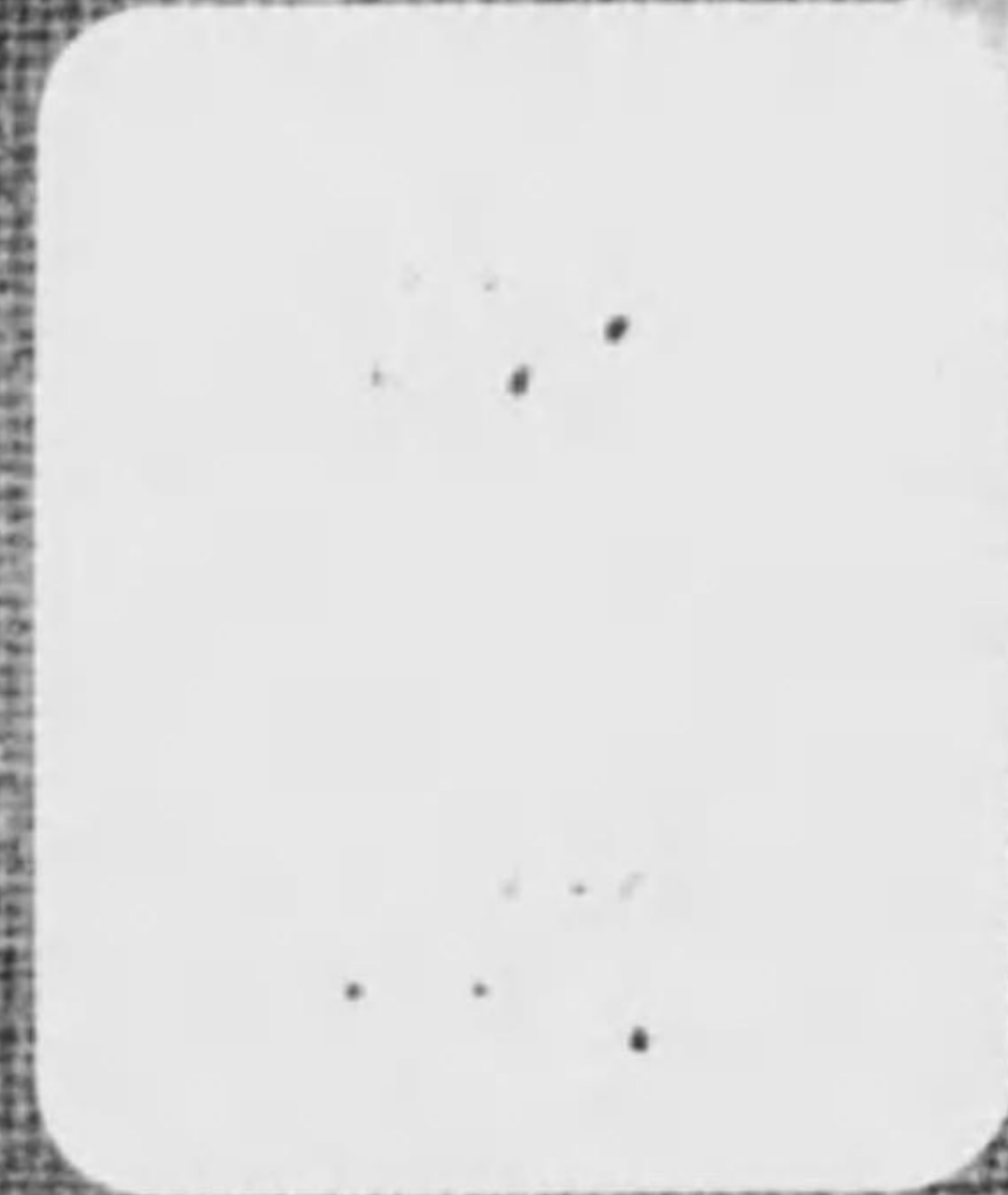


516
357

貴族院
函
号
册

臺灣現勢要覽

昭和四年版



貴族院
函
号
冊

貴族院

函

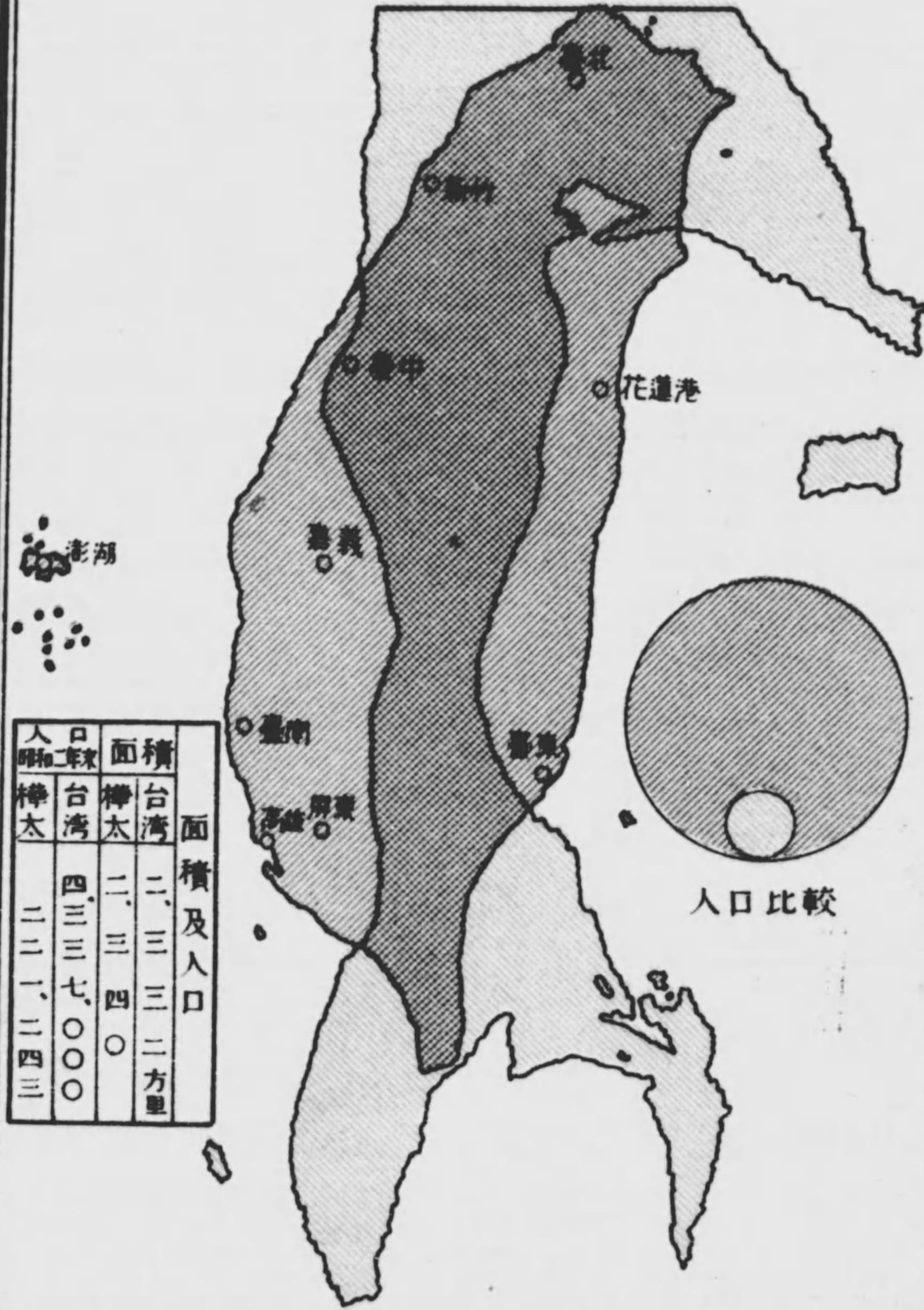
号

册

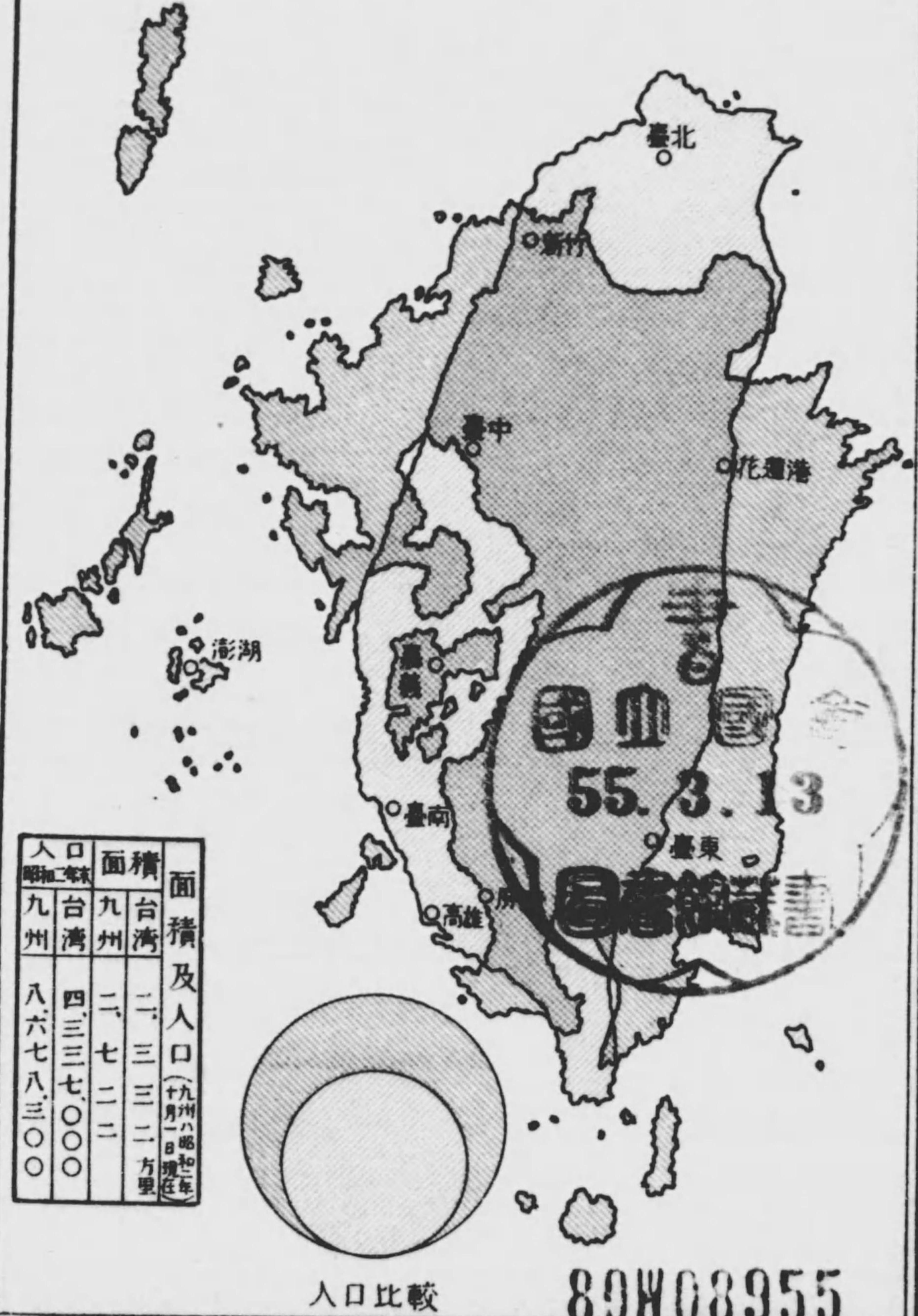
臺灣現勢要覽



II 臺灣及樺太面積並人口比較

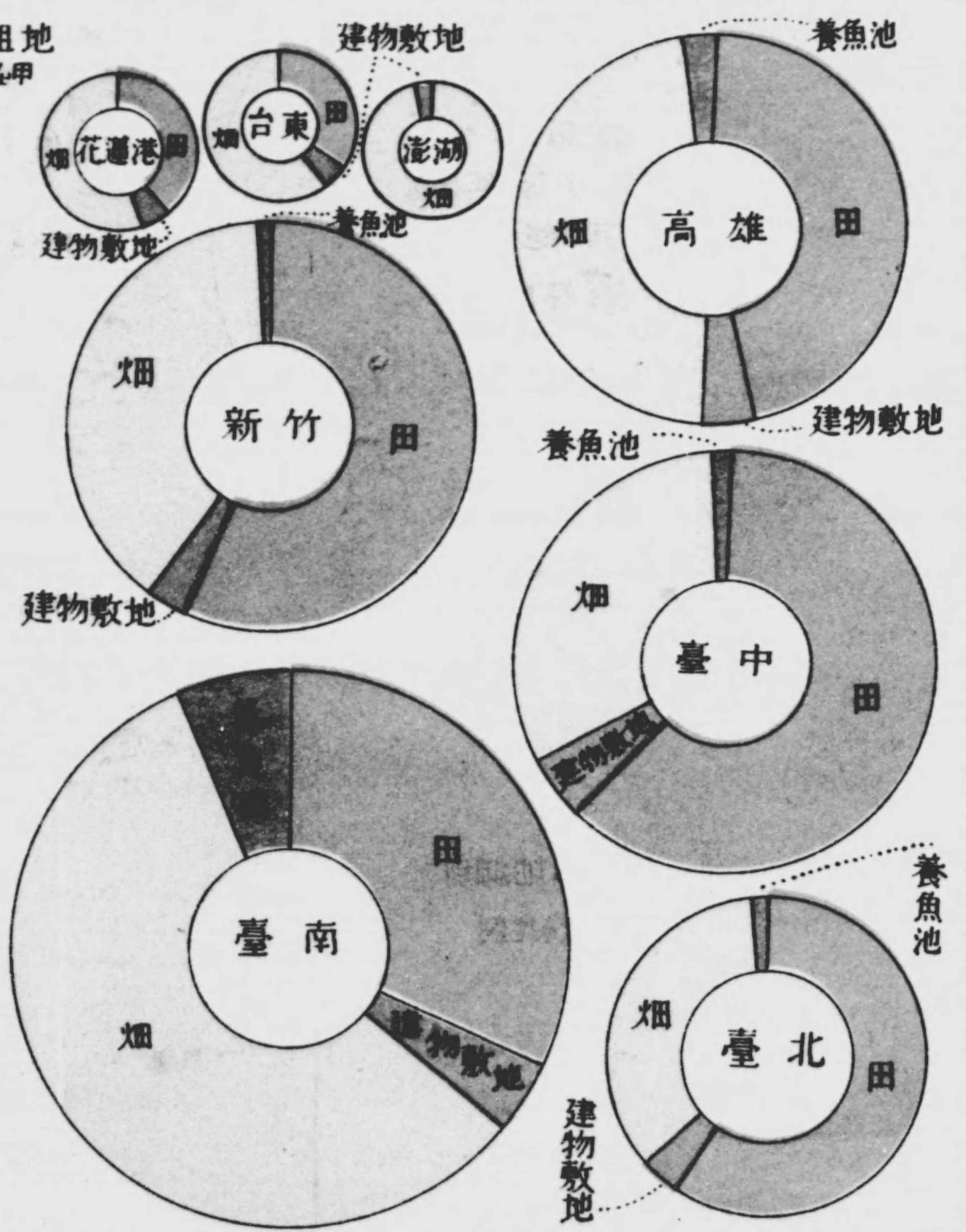
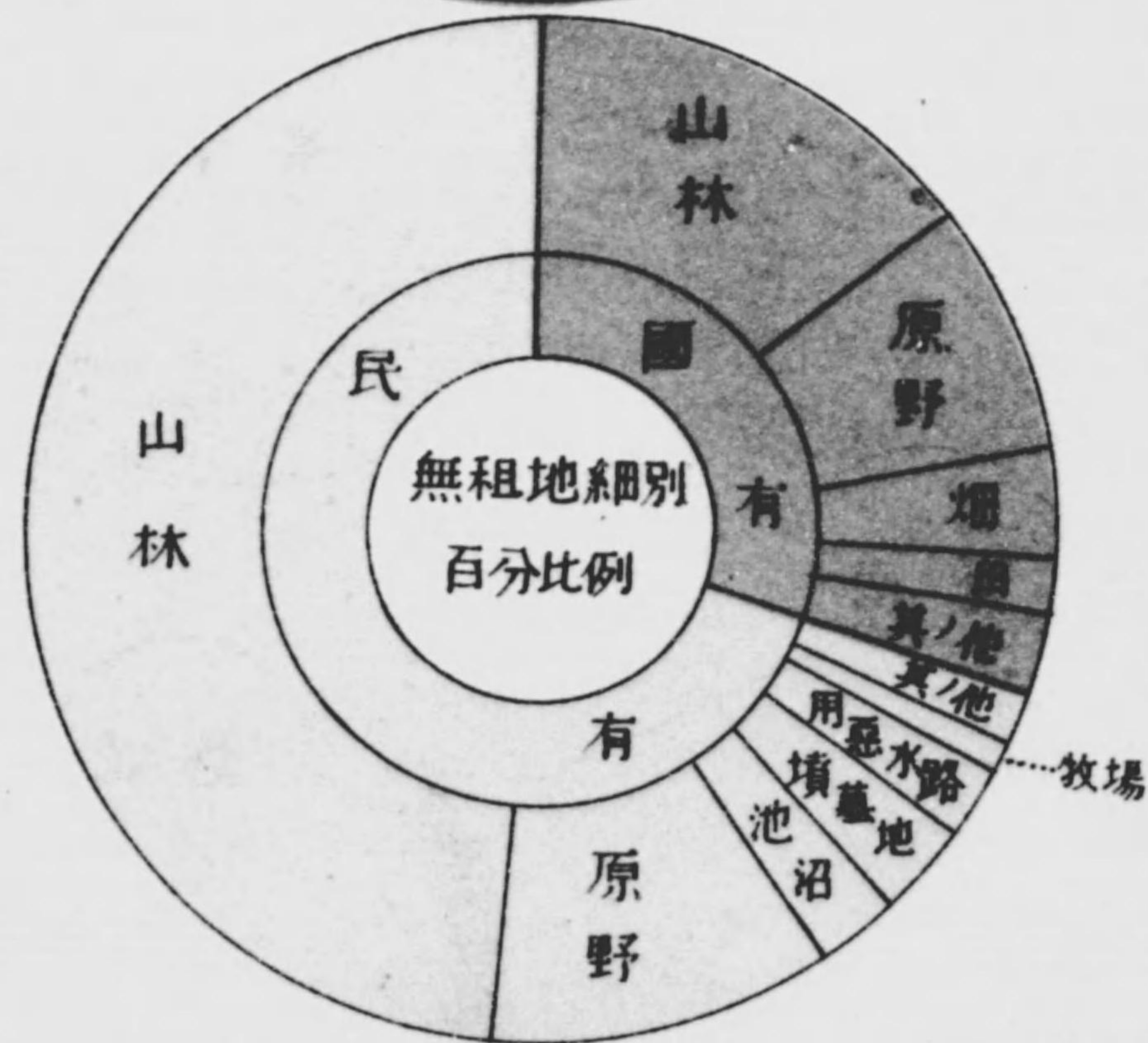
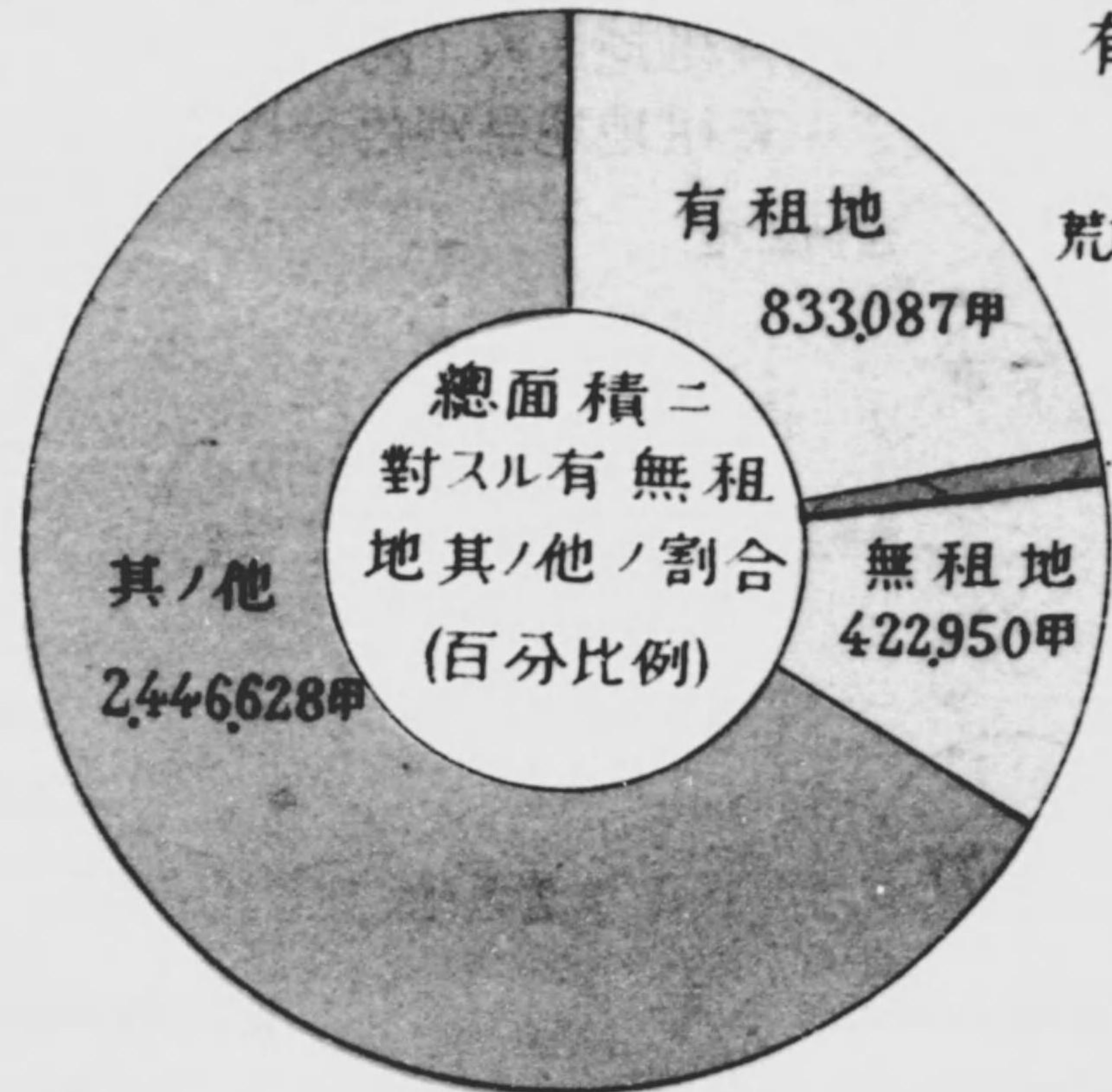


I 臺灣及九州面積並人口比較



III 土地 (昭和三年一月一日現在)

有租地總面積ニ對スル州廳別有租地比較 (圖ノ大小ヲ以テ示ス)
 並各州廳ニ於ケル有租地地目別百分比例



凡例

- 一 本書は、臺灣の現勢を知るの便に資せんか爲め、主要なる事項に就て、その統計的説明を試みたるものなり。
- 二 本書は、昭和二年の事實を基礎としたるも、その最近の統計あるものは努めて之を採り、又昭和二年の事實不明のもの若は特に必要と認めたるものは、昭和二年以前の統計をも採りたり。
- 三 本書は、主として臺灣の現勢を知るを目的とするも、特にその變遷進歩の狀態を説明するの必要ある事項に就ては、累年の統計をも擧げたり。
- 四 本書は、帝國に於ける臺灣の地位を説明するの便に供せんか爲め、その必要なる事項に就ては、内地府縣、北海道、朝鮮、樺太、關東州等との比較對照をも試みたり。

昭和四年五月

臺灣現勢要覽目次

一	位置	一
二	面積	六
三	山嶽	一〇
四	河川	三〇
五	土地の利用	三
六	氣候	三
七	雨量	四
八	人口	一七
九	本籍別内地人	二〇
一〇	在外臺灣人	三
一一	在留外國人	二六
一二	臺灣語を話す内地人	二六
一三	國語を解する本島人	三〇
一四	婚姻、離婚、出生及死亡	三二
一五	出生率	三三
一六	死亡率	三四
一七	人口の増加	三七

一八	蕃人	四三
一九	行政區劃	四五
二〇	州及廳の面積	四七
二一	州及廳の人口	五〇
二二	主要都市	五三
二三	農業戶數	五七
二四	耕地面積	五九
二五	水利	六一
二六	農產	六二
二七	畜產	六五
二八	林產	六七
二九	礦產	六九
三〇	水產	七一
三一	工業	七四
三二	糖業	七六
三三	貿易	七八
三四	對手國別外國貿易	八二
三五	支那、香港及南洋貿易	八五
三六	重要品別外國貿易	八八

圖表

I 臺灣及九州面積並人口比較
 II 臺灣及樺太面積並人口比較
 III 土地

三七	重要品別內地貿易	九一
三八	港別貿易	九四
三九	財政	九六
四〇	專賣	九八
四一	銀行	一〇一
四二	物價	一〇三
四三	教育	一〇五
四四	衛生機關	一〇九
四五	水道	一一一
四六	ペストとマラリア	一一三
四七	阿片吸食特許者	一一五
四八	鐵道	一二七
四九	郵便、電信、電話	一二九
五〇	警察官署及職員	一三三
五一	最近十六年間の進歩	一三五

臺灣現勢要覽

一 位 置

臺灣は帝國の最南端に位し、臺灣本島、澎湖列島及其他の附屬島嶼より成る。今之を經緯度に緯ぬるに、東經百十九度十八分より百二十二度六分、北緯二十一度四十五分より二十五度三十八分に至る。北は海上六百二十四哩にして九州の南端鹿兒島に達し、西は臺灣海峡を隔て、近く支那大陸に相接し、東は太平洋を隔て、遠く米大陸に相對し、南はパツシゝ海峡を隔て、近く比律賓群島に相隣す。

經度及緯度

臺灣本島		澎湖島	
經度(東經)	緯度(北緯)	經度(東經)	緯度(北緯)
極東 臺北市基隆市棉花嶼東端	極東 臺北市基隆市棉花嶼東端	極東 臺北市基隆市棉花嶼東端	極東 臺北市基隆市棉花嶼東端
極西 臺南州北港郡口湖庄新港西端	極西 臺南州北港郡口湖庄新港西端	極西 臺南州北港郡口湖庄新港西端	極西 臺南州北港郡口湖庄新港西端
極南 高雄州恒春郡七星岩南端	極南 高雄州恒春郡七星岩南端	極南 高雄州恒春郡七星岩南端	極南 高雄州恒春郡七星岩南端
極北 臺北市基隆市彭佳嶼北端	極北 臺北市基隆市彭佳嶼北端	極北 臺北市基隆市彭佳嶼北端	極北 臺北市基隆市彭佳嶼北端
極東 澎湖廳湖西庄查母嶼東端	極東 澎湖廳湖西庄查母嶼東端	極東 澎湖廳湖西庄查母嶼東端	極東 澎湖廳湖西庄查母嶼東端
極西 望安庄花嶼西端	極西 望安庄花嶼西端	極西 望安庄花嶼西端	極西 望安庄花嶼西端
極南 望安庄大嶼南端	極南 望安庄大嶼南端	極南 望安庄大嶼南端	極南 望安庄大嶼南端
極北 白沙庄目斗嶼北端	極北 白沙庄目斗嶼北端	極北 白沙庄目斗嶼北端	極北 白沙庄目斗嶼北端
度			
一一三・〇六	一一三・〇六	一一三・〇六	一一三・〇六
一一〇・〇一	一一〇・〇一	一一〇・〇一	一一〇・〇一
一一・四五	一一・四五	一一・四五	一一・四五
二五・三八	二五・三八	二五・三八	二五・三八
一九・四三	一九・四三	一九・四三	一九・四三
二九・一八	二九・一八	二九・一八	二九・一八
一一三・一〇	一一三・一〇	一一三・一〇	一一三・一〇
一一三・四六	一一三・四六	一一三・四六	一一三・四六

二 距

離 基隆を基點とする直航里程

盤西海麻香上汕厦福大釜横神門長鹿那
尼 兒

谷貢防刺港海頭門州連山濱戶司崎島霸
(香港經由) (鹿兒島沖通過)

一、八三九
一、八九五
一、三〇〇
九六一
七七六
四七九
四一八
三二八
二二六
一五一
八五〇
七二五
一、三三七
九八二
七三九
六三三
六二四
三三四

新嘉坡
バタビヤ

一、八三四
二、六九四

二 面積

臺灣の面積は二千三百三十二方里にして、帝國の總面積四萬三千七百方里中その五分三厘を占め、九州よりは稍や小さく、樺太と伯仲し、朝鮮に比すれば約その六分の一に當る。尙ほ之を列國の面積に比すれば、瑞西(二千六百七十八方里)とサルバドル(二千二百十三方里)との中間に位す。

總數	面積		百分比例
	方里	方料	
臺灣	四三、六九三	(六七三、八九五)	100.0
朝鮮	二、三三二	(三五、九七四)	五.三
樺太	一四、一六五	(二二〇、〇一七)	三二.六
北海道	二、三四〇	(三六、〇九〇)	五.四
内地府縣	五、七三五	(八八、四五四)	一三.二
	一九、〇一〇	(二九三、三六〇)	四三.六

本表の外租借地として關東州(州内、鐵道附屬地)の面積二百四十一方里(三千七百十八方料)及南洋委任統治區域の面積百三十九方里(二千四百四十九方料)あり。本表は帝國統計年鑑に依る。

三山嶽

臺灣は帝國第一の高山新高山を始めとし、海拔一萬尺以上のもの四十八座、九千尺級のもの十七座、八千尺級のもの二十四座、七千尺級のもの二十六座を有す。故に七千尺以上の高山の總數は百十五座の多きに達し、所謂「高山國」の名に背かすして熱帯、暖帯、温帯、寒帯等各種の林相を有す。

帝國の全領土を通して一萬尺以上の高山は總數六十一座を算し、就中臺灣四十八座を占め、内地は僅かに十三座を有し、北海道、朝鮮、樺太は共に之を缺く。即ち新高山は一萬三千三十五尺を以て第一位を占め、富士山は漸く第六位に在り、内地第二の高山北嶽は僅かに四十一位を占むるに過ぎず。

山名	海面よりの高さ 尺	米	順位
新高山	13,035	(三、九五〇)	一
次高山	12,973	(三、九三一)	二
秀姑巒山	12,650	(三、八三三)	三
マボラス山	12,560	(三、八〇六)	四
南湖大山	12,531	(三、七九七)	五
富士山(内地)	12,467	(三、七七八)	六
中央尖山	12,260	(三、七二五)	七
關山	12,100	(三、六六七)	八

大水窟山	11,018	(三、六四五)	九
奇萊主山北峰	11,895	(三、六〇五)	一〇
東郡大山	11,895	(三、六〇五)	一一
大雪山	11,880	(三、六〇〇)	一二
大霸尖山	11,792	(三、五七三)	一三
雲萊主峰	11,778	(三、五六九)	一四
奇萊主山	11,695	(三、五四四)	一五
東巒大山	11,436	(三、四六五)	一六
合歡山	11,200	(三、三九四)	一七
北合歡山	11,200	(三、三九四)	一八
東合歡山	11,200	(三、三九四)	一九
南玉山	11,191	(三、三九一)	二〇
桃山	11,188	(三、三九〇)	二一
シカン山	11,157	(三、三八一)	二二
畢祿山	11,151	(三、三七九)	二三
丹大山大	11,124	(三、三七一)	二四
白姑大山	11,051	(三、三四九)	二五
奇萊主山南峰	11,005	(三、三三五)	二六
南雙頭山	10,000	(三、三三三)	二七

能高山南峰	11,000	(三,五五五)	二八
卑南主山	10,905	(三,五〇五)	二九
千卓萬山	10,903	(三,五〇四)	三〇
カシバナ山	10,869	(三,二九四)	三一
郡大	10,865	(三,二九二)	三二
タロコ大山	10,863	(三,二九二)	三三
卓社大山	10,816	(三,二七八)	三四
小關	10,740	(三,二五五)	三五
能高山	10,731	(三,二五二)	三六
屏風	10,673	(三,二三四)	三七
大武	10,665	(三,二三二)	三八
尖山	10,631	(三,二二二)	三九
バトツノフ山	10,630	(三,二二二)	四〇
北嶽(内地)	10,534	(三,一九二)	四一
間ヶ嶽(内地)	10,524	(三,一八九)	四二
鎗ヶ嶽(内地)	10,492	(三,一七五)	四三
槍ヶ岳(内地)	10,487	(三,一七八)	四四
ハイノトナシ山	10,478	(三,一七五)	四五
マビーサン山	10,450	(三,一六七)	四六

白石山	10,354	(三,一三八)	四七
ウワノシン山	10,334	(三,一三二)	四八
赤石山(内地)	10,196	(三,110)	四九
奥穂高岳(内地)	10,140	(三,101)	五〇
東俣山(内地)	10,111	(三,〇九五)	五一
穂高岳(内地)	10,197	(三,〇九〇)	五二
安東郡山	10,193	(三,〇八九)	五三
巒大山	10,150	(三,〇七六)	五四
御嶽山(内地)	10,109	(三,〇六三)	五五
關門山	10,073	(三,〇五二)	五六
大石公山	10,060	(三,〇四八)	五七
白根山(内地)	10,055	(三,〇四七)	五八
小雪山	10,043	(三,〇四三)	五九
仙丈ヶ嶽(内地)	10,009	(三,〇三三)	六〇
南嶽(内地)	10,008	(三,〇三三)	六一

内地の分は第四十五回國勢一班に依る。

四河川

臺灣は幅員狭く、その最も廣き部分と雖、僅かに四十里内外に過ぎず、且つ高峰南北に貫通するを以て、河川の發源孰れも近く、舟楫の便は多く望むべからず。流域二十里以上のもの僅かに十を算し、最長の河川たる濁水溪にして漸く四十二里に過ぎず。

濁水溪	四二〇	(一六四九)
下淡水溪	三九七	(一五五九)
曾文溪	三三七	(一三二三)
淡水河	三三一	(一三〇〇)
大甲溪	三〇〇	(一七七八)
烏溪	二八六	(一一三三)
八獎溪	二八三	(一一二一)
秀姑巒溪	二二六	(八八八)
卑南溪	二二五	(八四四)
大安溪	二〇五	(八〇五)

本表は流域二十里以上のもののみを掲ぐ。

五 土地の利用

臺灣の總面積は三百六十二萬七千町步（三百七十萬八千甲）にして、内耕地八十萬町步（八十二萬甲）、林野二百五十五萬町步（二百六十一萬甲）、其の他二十七萬町步（二十七萬甲）なり。

今之を内地其の他と比較するに、總面積に對する耕地の割合最も大なるは、關東州の五割二分にして、臺灣は二割二分を以て之に亞き、樺太の七厘最も小なり。林野に於ては樺太の八割九分最も大にして、朝鮮の七割四分、北海道、臺灣の七割之に亞き、關東州の二割五分最も小なり。耕地及林野以外の土地の割合最も大なるは内地府縣の二割六分にして、朝鮮の六分最も小なり。

實數	百分比例					
	耕地	林野	其他			
臺 灣	八〇三、四〇一	二、五五六、四四〇	二六七、四九二	二二・一	七〇・五	七・四
朝 鮮	四、三八七、七二七	一、六四七、〇〇〇	一、三二七、三三二	一九・八	七四・二	六・〇
樺 太	二四、〇九五	三、二五三、四三二	三六一、五三二	〇・七	八九・四	九・九
關 東 州	一九四、二九六	九四、九〇七	八五、七四〇	五二・八	二五・三	二二・九
北 海 道	七八九、四三〇	六、三〇三、六三三	一、八二六、〇五六	八・八	七〇・七	二〇・五
内地府縣	五、二九〇、七二六	一、六五九三、〇〇二	七、六九六、七五一	一七・九	五六・一	二六・〇
耕地は昭和二年末現在なり。						

林野の臺灣、樺太、關東州（州内、鐵道附屬地）、北海道及内地府縣は昭和二年末現在、朝鮮は昭和三年五月末現在なり。

朝鮮、樺太、關東州は同廳統計書に依る。

北海道、内地府縣は農林省統計表に依る。

青	新	東	大
森	潟	京	阪
九・五	二・四	一四・二	一五・一
四九・一	五四・三	五七・六	五九・二
九・三	一二・六	一三・九	一五・〇
四八・七	五四・七	五七・〇	五九・〇
三六・〇	三九・一	三六・六	三七・六
九六・八	一〇二・四	九七・九	九九・七
四一八(一)	四二一(一)	一九七(二)	四二一(二)
一九〇(二)	九七	八二	七二
二二	一四五	一七二	一九二
二四	三五	七一	二四
二	一一	一一	一一

(一)は零點下を示す。

七 雨 量

臺灣は南北に依り其の降雨期を異にす。即ち北部は十月より翌年三月迄の冬季六箇月、南部は五月より九月に至る夏期五箇月を雨期とす。北部は基隆附近最も降雨量多く、基隆に近き暖暖は一年五千耗を以て第一位を占め、且つ世界有数の降雨地として知らる。南部に於ては潮州郡蕃地クルスの五千三百耗最多量を示し、降雨量の最も少きは澎湖島にして一年の總量九百六十耗なり。更に之を内地其他と比較するに、臺灣は全島を通して一般に他の地方よりも降雨量多し。

臺	恒	蕃地	臺	臺	澎	阿	臺	臺
灣	春	クルス	東	南	湖	山	中	北
二、九二八	五、四七二	二、七四九	一、六三九	九八七	三、五二二	一、四九二	二、六五八	二、六五八
二、二四二	五、三五二	一、八〇七	一、七〇八	九六一	三、九四八	一、六八四	二、〇七七	二、〇七七
二九四	四八二	二二三	一三九	五三	一七七	六五	一三九	一三九
七一一	七二二	七二二	八一	五二	五二	九一	六一	六一
月	日	日	日	日	日	日	日	日

昭和二年
總雨量

累年平均
總雨量

昭和二年
最多日量

青新

森 湯

一、九〇七
一、三九九

一、八一〇
一、四〇〇

七六
三七

七一七
七一二

東	大	長	那	内	旭	札	函	北	關	樺	大	城	京	釜	朝	暖	基
				地				海	東								
				府													

京	阪	崎	霸	縣	川	幌	館	道	順	州	泊	太	津	城	山	鮮	暖	隆
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

一、四九八	九六〇	二、七〇一	一、六四四	一、〇五〇	一、〇四七	一、二四一	四二五	七七九	九三〇	一、二七一	一、六三二	五、八〇七	三、一三九
-------	-----	-------	-------	-------	-------	-------	-----	-----	-----	-------	-------	-------	-------

一、五六四	一、三六七	一、九四一	二、二二二	一、〇三〇	一、〇七一	一、一六四	五九一	七三七	六九三	一、二六四	一、四四四	五、〇三六	二、八七九
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-----	-----	-----	-------	-------	-------	-------

九四	八二	二〇五	一四五	五〇	七二	七三	五九	三二	一五三	一三三	一七九	一九三	二二三
----	----	-----	-----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----

九一四	九二八	八一七	五一七	八一三	七一八	八一三〇	七一三	八一三	八一〇	七一四	七一〇	九一八	九一六
-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

八 人 口

臺灣の總人口は昭和二年末現在四百三十萬人にして内、内地人二十萬人、本島人四百萬人(平地居住の蕃人を含む)、蕃人八萬六千人(蕃地居住者のみ)、外國人三萬七千人なり。昭和二年末現在帝國の總人口は八千五百萬人を算し、臺灣は四百三十萬人、蕃地居住の蕃人を含む)にして實に其の五分を占む。更に臺灣の人口を列國のそれに比すれば、勃爾牙利(五、四八三、〇〇〇)と智利(四、二一九、〇〇〇)との中間に位す。

一 種族別人口 (昭和二年末現在)

種族	總 數		百分比
	男	女	
總 數	四、三三七、〇〇〇	二、二一三、六七一	100.0
内地人	二〇二、九九〇	一〇九、〇五五	四.七
本島人	四、〇〇九、二二七	二、〇四四、三二七	九二.四
蕃人	八六、八四〇	四三、七二八	二.〇
外國人	三七、九五三	二六、五七一	〇.九

本島人中には平地の蕃社に居住する蕃人五萬二千四百八十七人を合算せり。故に本表の蕃人には蕃地の蕃社に居住する者のみを掲上せり。

二 内地其他との人口比較 (昭和二年末現在)

種族	實 數	百分比	一方里に付
總 數	八五、〇二二、五四一	100.0	一九四六
臺 灣	四、三三七、〇〇〇	五.一	一、八五九
朝鮮	一九、一三七、六九八	二二.五	一、三四二
樺 太	二、二二二、四三三	〇.三	九五
北海道	二、五五七、一〇〇	三.〇	四四六
内地府縣	五八、七五九、五〇〇	六九.一	三、〇八九

本表の外租借地としての關東州(州内、鐵道附屬地)は人口百十萬八千九百六十四人を有し、一方里に付人口四千六百人及南洋委任統治區域は人口五萬八千八百十六人を有し、一方里に付人口四百二十三人を算す。
朝鮮、樺太、關東州及南洋委任統治區域は同廳統計書に依る。
北海道、内地府縣は昭和二年十月一日現在にして帝國統計年鑑に依る。

平地面積のみなれば
三、四一七

九 本籍別内地人

臺灣在住内地人の總數は大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、十六萬四千人にして内、熊本縣の一萬六千三百五十三人第一位を占め鹿兒島縣は一萬六千二百七十二人を以て之に亞き、福岡縣は遙かに下りて八千八百九十八人を以て第三位に在り、廣島、山口の兩縣順次に亞き其の最も少きは青森縣の二百八十二人なり。

府縣	人口	百分比	順位
熊本縣	一六、三五三	一〇・一	一
鹿兒島	一六、二七二	九・九	二
福岡縣	八、八九八	五・四	三
廣島	八、四〇一	五・一	四
山形	七、四六三	四・五	五
佐賀	六、七八〇	四・一	六
東京	六、三四七	三・九	七
長崎	六、〇五八	三・七	八
宮城	五、六五七	三・四	九
大阪	四、六七五	二・八	一〇
大分	四、五三四	二・八	一一

新兵 愛愛 岡宮 高岐 沖繩 石川 香川 福島 靜岡 和京 茨城 德島 三

庫 鴻 知 媛 山 崎 知 阜 繩 川 川 島 根 岡 山 都 城 島 重

四、四五六	二・七	三
四、二二〇	二・六	三
三、八二五	二・三	四
三、七三二	二・三	五
三、一三四	一・九	六
二、八二〇	一・七	七
二、七八九	一・七	八
二、六五〇	一・六	九
二、四三三	一・五	一〇
二、四二八	一・五	一一
二、四〇一	一・五	一二
二、三九〇	一・五	一三
二、三九七	一・四	一四
二、二九五	一・四	一五
二、二〇六	一・三	一六
二、一四二	一・三	一七
二、一三三	一・三	一八
一、九七九	一・二	一九
一、九二三	一・二	二〇

一〇 在外臺灣人

在外臺灣人の總數は、大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、四千七百八十五人にしてその大部分は支那に在留す。即ち支那在留臺灣人の總數は四千二百三十六人にして、就中その三千八十五人は對岸廈門に居住し、福州は七百六十六人、汕頭は二百三十六人を算す。

支那以外の地方に在りては、爪哇の二百十八人第一位を占め、海峽植民地の百五人之に亞く。

總數	男	女
總數	三、〇一五	一、七七〇
關東	一九	一五
青島	四	一
支那	四、二三六	一、六一一
廈門	三、〇八五	一、二七四
福州	七六六	三二八
汕頭	二二六	七三
廣東	三一	一三
其他	二一八	三三
爪哇	二二八	六九

海峽植民地	一〇五	八一	二四
新嘉坡	三三	二六	七
其他	三七	二九	八
緬甸	七六	三八	三八
香港	五七	四三	一五
暹羅	三五	三〇	五
比律	三一	二九	二
濠洲	三	三	一
智利	一	一	一

一一一 臺灣語を話す内地人

内地人にして臺灣語を話すもの、數は、明治三十八年の六千八百二十九人より、大正四年の一萬六千五百九十一人に増加し、更に大正九年には一萬七千二百七十三人に増加したるも、その内地人千に對する割合は、大正四年の百二十二分より、大正九年の百五人二分に減退したり。

年	總數		平均	
	男	女	男	女
明治三十八年	六、八二九	六、〇一〇	八〇九	一〇〇
大正四年	一六、五九一	一三、四〇三	三、一八八	二四三
同 九年	一七、二七三	一四、九六六	二、三〇七	二五三

男女別内地人千に付

年	男	女
明治三十八年	二、九一	一、七三八
大正四年	一、二二五	一、七六九
同 九年	一、〇五二	一、六二六

本表は第一回及第二回戸口調査並に第一回國勢調査の結果にして何れも十月一日現在なり。

一一三 國語を解する本島人

本島人にして國語を解するもの、數は、明治三十八年の一萬一千二百七十人より、大正四年の五萬四千三百三十七人に増加し、更に大正九年には九萬九千六十五人に増加したるも、尙ほ本島人千に對し僅かに二十八人六分を算するに過ぎず。

年	總數		平均	
	男	女	男	女
明治三十八年	一、一七〇	一〇、八〇一	四六九	一〇〇
大正四年	五、四三七	五〇、一四三	四、二九四	四八二
同 九年	九、九〇五	八七、八九七	二、二六八	八七九

男女別本島人千に付

年	男	女
明治三十八年	三、八	六、八
大正四年	一、六三	二、九一
同 九年	二、八六	四、九三

本表は第一回及第二回戸口調査並に第一回國勢調査の結果にして何れも十月一日現在なり。

一四 婚姻、離婚、出生及死亡

臺灣に於ける最近十六年間の婚姻、離婚、出生及死亡を觀るに、人口千に付婚姻は大正元年の十一件三分より昭和二年の十件七分に減少し、離婚は同しく一件五分より昭和二年には一件七厘に減少し、出生は大體に於て増加の傾向を有し、大正元年の四十一人九分如き三十四人八分の多きに達したるも、昭和二年には依り非常の相違あり、大正七年の出生の死亡超過數は年により甚たしき懸隔あり、大正七年の如き僅かに二萬人に過ぎざりしか、昭和二年には九萬人に達したり。

年	婚姻	離婚	出生(生産)	死亡	自然増加 (出生超過)
大正元年	三七、九一九	五、〇八二	一四〇、四九八	八四、九六三	五五、五三五
同 二年	三六、一六七	五、一六〇	一四一、三三七	八六、六一〇	五四、七六九
同 三年	三三、九七七	四、六六四	一四六、一三六	九七、五二一	四八、六一五
同 四年	三八、五八六	五、一九五	一四二、五〇五	一一一、二三三	三〇、三八二
同 五年	三七、六〇四	五、四四五	一三三、七二七	一〇一、五一九	三二、一九八
同 六年	三八、〇九五	五、〇七八	一四八、二〇九	九七、九四九	五〇、二六〇
同 七年	四〇、九〇二	四、九六八	一四五、一六二	一二四、六七七	二〇、四八五
同 八年	三八、三四一	五、一六五	一四二、三二〇	九八、九九一	四三、三二九

同 九年	四〇、九一五	四、七二二	一四七、三〇八	一一九、四七七	二七、八三一
同 十年	四〇、八二九	四、六五八	一六一、九八七	九一、五二三	七〇、四七四
同 十一年	三七、八三一	四、二二五	一六一、八二九	九五、三七二	六六、四五七
同 十二年	三九、四八〇	四、三三八	一五四、〇七八	八四、一〇八	六九、九七〇
同 十三年	四二、一〇一	四、四三七	一六六、一八三	九八、四〇五	六七、七七八
同 十四年	三七、六〇三	四、〇六六	一六六、九〇一	九八、〇四三	六八、八五八
昭和元年	四六、七七八	四、八二二	一八三、三六〇	九三、七二〇	八九、六四〇
同 二年	四五、五七二	四、五五四	一八五、一九五	九四、八四三	九〇、三五二

同 九年	四〇・一	二七六	三五・一	二六・三	四一・三	三四・七
同 十年	四三・二	二九七	三一・二	二五・四	三八・五	三四・九
同 十一年	四三・三	三三八	三一・三	二六・四	三七・四	三四・三
同 十二年	三九・六	四〇・二	三二・二	二五・四	三五・八	三四・九
同 十三年	四二・〇	三八・二	三四・三	二七・三	三四・六	三四・八
同 十四年	四二・一	三八・〇	三二・〇	二八・七	三九・三	三四・八
昭和元年	四四・一	三五・四	三三・三	二五・九	三九・〇	三四・六
同 二年	四三・六	三六・五	三四・八	二五・三	三八・九	三四・四

朝鮮、樺太、關東州(州内、鐵道附屬地、領事館)は同廳統計書に依り算出す。
 北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依り算出す。

一六 死亡 率

臺灣の死亡率は之を最近十六年間に就て觀るに、是れ亦高低常ならずと雖、大正十二年には著しく低下し、人口千に付二十一人六分を以て最低の記録を示せり。内地人の死亡率は之を本島人に比すれば甚だ低く、昭和二年には本島人二十二・九分なるに對し、内地人は僅かに十二人を示せり。

更に之を内地其他と比較するに、死亡率の最も低きは關東州にして、北海道之に亞き、最近は我臺灣最も高率を示しつゝありしか昭和二年には樺太の二十六・二分最も高し。又列國中死亡率の最も高きは、智利にして昭和元年には二十七・三分を示せり。

一 死亡 率 (人口千に付)

大正元年	平均	内地人	本島人	外國人
同 二年	二五・三	一五・八	二五・八	一五・四
同 三年	二五・三	一五・三	二五・八	一三・一
同 四年	二八・二	一五・〇	二八・七	一九・五
同 五年	三三・三	一七・三	三三・九	一九・四
同 六年	二九・二	一六・〇	二九・八	一六・八
同 七年	二七・五	一六・五	二八・〇	一七・七
同 八年	三四・八	一九・六	三五・五	二二・七
同 九年	二七・三	一六・八	二七・八	二〇・八

一七 人口の増加

臺灣の人口は、明治三十八年十月一日施行の第一回戸口調査の結果に依れば、三百萬なりしものか、大正元年末には三百三十五萬に増加し、更に昭和二年末には四百二十五萬に達し過去十六年間に二割七分の増加を示せり。
 更に人口増加の趨勢を内地其の他と比較するに、増加の割合最も大なるは樺太にして、關東州之に亞き、北海道、朝鮮、臺灣、内地の順序を以て之に亞く。

一 最近十六箇年間の人口 (各年末現在)

年	總數	男	女	指數
大正元年	三、三五三、九四三	一、七六三、四八四	一、五九〇、四五九	100
二年	三、四一八、二七〇	一、七九四、八〇八	一、六二三、四六二	101
三年	三、四六八、七一九	一、八一八、〇五六	一、六五〇、六六三	103
四年	三、四八三、二六六	一、八一四、九四四	一、六六八、三三二	104
五年	三、五〇一、一〇〇	一、八二四、一五〇	一、六八五、九六〇	105
六年	三、五〇六、〇五〇	一、八四六、四四五	一、七二三、六〇五	106
七年	三、五八三、三九五	一、八五六、一七八	一、七三七、二七	107
八年	三、六三〇、三八五	一、八七八、八一〇	一、七五一、五七五	108
九年	三、六七五、二九〇	一、九〇二、七九〇	一、七七〇、五〇〇	110

年	總數	男	女	指數
同 十一年	三、七五一、二二七	一、九四一、五八二	一、八〇九、六三五	111
同 十二年	三、八二一、五二八	一、九七四、八一四	一、八四六、七二四	114
同 十三年	三、八九一、九二一	二、〇〇八、〇九〇	一、八八三、八三一	116
同 十四年	三、九五六、七〇六	二、〇三八、一八三	一、九一八、五二三	118
同 十五年	四、〇六一、五二四	二、〇八七、九一九	一、九七三、六〇五	121
昭 和 元 年	四、一五五、〇二六	二、一三二、九九八	二、〇〇三、〇一八	124
同 二年	四、二五〇、一六〇	二、二七九、九五三	二、〇七〇、二〇七	127

本表には蕃地の蕃社に居住する蕃人を除き、平地の蕃社に居住する蕃人は之を算入せり。

二 内地其の他との累年人口指數比較 (各年末現在)

年	臺灣	朝鮮	樺太	關東州	北海道	内地府縣
大正元年	100	100	100	100	100	100
同 二年	101	104	105	105	104	101
同 三年	103	107	106	107	108	103
同 四年	104	110	104	111	110	104
同 五年	105	112	107	115	114	105
同 六年	106	114	107	122	120	107
同 七年	107	115	109	129	125	106

同八年	108	126	101	137	129	107
同九年	110	127	126	156	133	106
同十年	113	128	146	161	142	107
同十一年	114	129	155	161	149	109
同十二年	116	131	168	168	156	110
同十三年	118	133	174	174	163	111
同十四年	121	135	187	187	174	112
昭和元年	124	139	188	188	175	115
同二年	127	141	197	197	177	116

朝鮮、樺太、關東州(州内)、鐵道附屬地、領事館(は同廳統計書に依る。
 北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依る。
 内地府縣及北海道の大正九年以後は十月一日現在なり。

一八 蕃 人

臺灣の蕃人は之をタイヤル、サイセツト、ブヌン、ツオウ、パイロン、アミ及ヤミの七種族に分つ。昭和二年末現在蕃社數は七百四十、戸數二萬三千二百二十七、人口十三萬九千人なるも、就中五萬二千四百人は平地の蕃社に居住するか故に、實際蕃地に居住するもの數は八萬六千八百人なり。

各種族中人口最も多きはパイロン族にして、總人口の約三割を占め、アミ族の二割九分、タイヤル族の二割三分等順次之に亞く。

種族	總數	男	女	百分比例
總數	139,327	69,734	69,593	100.0
タイヤル	32,906	16,145	16,761	23.6
サイセツト	12,791	6,500	6,291	9.1
ブヌン	18,561	9,552	9,009	13.3
ツオウ	21,068	11,100	9,968	15.1
パイロン	41,693	20,906	20,787	29.9
アミ	41,111	20,531	20,579	29.6
ヤミ	1,609	849	760	1.2

本表中平地の蕃社に居住する蕃人五萬二千四百八十七人は本島人として人口統計に計上せらる。

一九 行政區劃

臺灣の地方行政區劃は、幾多の變遷を経たる後、大正九年九月一日に至り、地方官官制に根本的改正を加へ、從來の十二廳を五州二廳に改めたりしも、大正十五年七月一日復た澎湖廳を設置して三廳となし現に五州は之を五市四十五郡に分ち、郡の下には三十一街、二百二十二庄を置き、三廳は之を十支廳に分ち、支廳の下には三街五庄十九區を置く。

澎湖廳	花蓮廳	臺東廳	高雄州	臺南州	新臺中州	新竹州	臺北州	全島
二	四	四	七	三	二	八	九	四五
郡								郡
								支廳
								支廳
								市
								市
								街
								街
								庄
								庄
								區
								區

本表は昭和三年十二月末現在なり。

二〇 州及廳の面積

五州三廳中、面積の最大なるは臺中州の四百七十八方里餘にして、高雄、臺南、花蓮港、新竹、臺北、臺東の順序を以て之に亞き、澎湖廳は僅かに八方里餘を以て最小の地位を占む。

今之を内地府縣に比較すれば、臺中州は熊本、宮城の中間に、高雄州は山口、三重の中間に、臺南州は愛媛、千葉の中間に、花蓮港廳、新竹州及臺北州は和歌山、京都の中間に、臺東廳は奈良、鳥取の中間に位し、澎湖廳は面積狭小にして比較すへき府縣なし。

一 州及廳の面積

全	方里	方料	百分比
臺北州	二,三三三・三九	(三五,九七三・五)	100.0
新竹州	二,九六〇・二	(四,五六五・七)	一二・七
臺南州	二,九八二・六	(四,五九八・六)	一二・八
高雄州	四,七八七・一	(七,三八三・四)	二〇・五
臺東廳	三,五一一・五	(五,四二一・五)	一五・〇
花蓮港廳	三,七一〇・三	(五,七三三・六)	一五・九
澎湖廳	二,三八六・四	(三,五二六・四)	九・八
澎湖廳	三,〇〇一・〇	(四,六二八・六)	一二・九
澎湖廳	八・三三	(一二・六・九)	〇・四

二 内地府縣との面積比較

面積

臺奈京臺新花和千臺愛三高山宮臺燕
 蓮歌
 東良都北竹葉南媛重雄口城中本
 港山
 廳縣府州州廳縣縣州縣縣州縣縣州縣

	方里	方料
燕	四八二・二三	(七、四三七七)
宮	四七八・七一	(七、三八三四)
山	四七二・四五	(七、二八六八)
高	三九四・三四	(六、〇八二一)
三	三七一・〇三	(五、七三二・六)
愛	三六九・七〇	(五、七〇二・一)
千	三六九・五〇	(五、六九九・〇)
和	三五一・五一	(五、四二一・五)
花	三二九・二九	(五、〇七八・八)
新	三〇六・八五	(四、七三二・七)
京	三〇〇・一〇	(四、六二八・六)
臺	二九八・一六	(四、五九八・六)
北	二九六・〇二	(四、五六五・七)
都	二九五・五六	(四、五五八・六)
良	二四一・八五	(三、七三〇・二)
東	二二八・六四	(三、五二六・四)

鳥取縣

二二六・二五

(三、四八九・六)

二 州及廳の人口

五州三廳中人口の最も多きは臺南州の百九萬人にして、臺中州は九十三萬人を以て之に亞き、以下臺北、新竹、高雄、花蓮港、澎湖、臺東の順序を以てし、一方里の人口は澎湖廳の七千五百人最も高く、臺東廳の六百八十人最も低し。

今之を内地府縣に比較すれば、臺南州は栃木、宮城の中間に、臺中州は大分、岩手の中間に、臺北州は岩手、青森の中間に、新竹州は滋賀、山梨の中間に、高雄州は奈良、沖繩の中間に位し、花蓮港、臺東及澎湖の三廳は人口餘りに少くして比較すべき類似の府縣なし。

一 州及廳の人口 (昭和二年末現在)

全	實數	百分比	一方里に付人口	
			平地面積 (蕃地を除外せる面積)	全面積
臺北	四、二五〇、一六〇	一〇〇・〇	三、四一七	一、八五九
新竹	八六六、七一一	二〇・四	四、八九一	二、九四六
臺南	六三五、五三六	一五・〇	三、七二七	二、一七二
高雄	九二九、七九四	二二・九	四、〇四四	一、九七七
花蓮港	一、〇九〇、三五一	二五・六	三、四〇五	三、一〇六
澎湖	五五五、一九六	一三・一	二、九九六	一、五七五

栃木縣 宮城縣 大分縣 岩手縣 青森縣 滋賀縣 新竹縣 山梨縣

二 内地府縣との人口比較

(昭和二年末現在) (内地府縣は昭和二年十月一日現在)

地方	實數	百分比	平地面積 (蕃地を除外せる面積)	全面積
臺東廳	四四、四八八	一・〇	六八六	二四九
花蓮港廳	六五、六四二	一・五	七四九	二五二
澎湖廳	六二、四四二	一・五	七五八七	七五八七
臺南州	六三五、五三六	一五・〇	三、七二七	二、一七二
新竹州	八六六、七一一	二〇・四	四、八九一	二、九四六
臺北州	四、二五〇、一六〇	一〇〇・〇	三、四一七	一、八五九
臺中州	九三三、〇〇〇	二二・九	四、〇四四	一、九七七
臺南州	一、〇九〇、三五一	二五・六	三、四〇五	三、一〇六
高雄州	九二九、七九四	二二・九	四、〇四四	一、九七七
花蓮港州	一、〇九〇、三五一	二五・六	三、四〇五	三、一〇六
澎湖州	五五五、一九六	一三・一	二、九九六	一、五七五
山梨縣	一、一〇八、八〇〇			
栃木縣	一、〇九〇、三五一			
宮城縣	一、〇七八、五〇〇			
大分縣	九三八、一〇〇			
岩手縣	九二九、七九四			
青森縣	九二四、二〇〇			
滋賀縣	八六六、七一一			
新竹縣	八三六、六〇〇			
山梨縣	六六七、二〇〇			
山梨縣	六三五、五三六			
山梨縣	六〇七、九〇〇			

本表には蕃地の蕃社に居住する蕃人を含みます、但し一方里に付人口の全面積には蕃地居住の蕃人をも加へて算出せり。

臺東廳	澎湖廳	花蓮港廳	沖繩縣	高雄州	奈良縣
四四、四八八	六二、四四二	六五、六四二	五五、一九六	五九一、九〇〇	五五、一九六

内地府縣は帝國統計年鑑に依る。

一一一 主要都市

臺灣には五市、三十四街あり。就中人口二萬以上の市及街は二十四にして、その第一位を占むるは臺北市の二十一萬、之に亞くは臺南市の八萬九千、基隆市の七萬、嘉義街の五萬、高雄市の四萬九千、臺中市の四萬六千、新竹街の四萬一千等なり。而して東部に於ける廳所在地たる臺東、花蓮港の兩街は僅かに九千を有するのみなり。

次に州及廳並に郡役所の所在地たる五市、三街を内地其の他の都市に比較するに、大正十四年十月一日現在に依れば、我が臺北市は、大阪、東京、名古屋、京都、神戸、横濱、京城、廣島の八市に亞て實に第九位を占め、長崎市の上に位し、臺南市は平壤、靜岡兩市の中間に、基隆市は松本、福井兩市の中間に、高雄市は秋田、郡山兩市の中間に、臺中市は福島、四日市兩市の中間に、新竹街は沼津、戸畑兩市の中間に位す。而して臺東、花蓮港の兩街は共にその人口樺太の首府豊原よりも少し。

一 主要都市の人口 (昭和二年末現在)

	總數	内地人	本島人	外國人	順位
臺北市(臺北州)	二一、六九六	五八、〇九四	一三、九四一	一四、一六二	一
臺南市(臺南州)	八九、八二三	一四、二三六	七、二二六	三、三六一	二
基隆市(臺北州)	六九、九六〇	一七、〇四八	四九、一七〇	三、七四二	三
嘉義街(臺南州)	五〇、二二三	七、七八二	四一、二三三	一、三二七	四

高雄市(高雄州)	四九,一七五	二二,三〇〇	三五,六九一	一,一八四	五
臺中市(臺中州)	四六,二五五	一一,七五〇	三五,三四九	一,一五六	六
新竹街(新竹州)	四一,一四〇	四,七八三	三五,九〇九	四四八	七
鹿港街(臺中州)	三三,九二一	二五一	三三,四九五	一七五	八
屏東街(高雄州)	三〇,一五四	四,〇五五	二五,〇六六	一,〇三三	九
斗六街(臺南州)	二八,八〇一	九九七	二七,六〇九	一九五	〇
大溪街(新竹州)	二七,九六八	四三七	二七,四六四	六七	一
清水街(臺中州)	二七,五八三	三四一	二七,一九九	四三	二
麻豆街(臺南州)	二六,一一一	六四二	二五,三九五	七四	三
員林街(臺中州)	二六,〇四六	六四二	二五,一九三	二一	四
豐原街(同)	二五,五三九	七〇五	二四,七二四	二〇	五
埔里街(同)	二五,一三六	九五二	二三,九七六	二〇八	六
南投街(同)	二四,〇五四	八三一	二三,一一八	一〇五	七
宜蘭街(臺北州)	二三,一三八	二,二一九	二〇,七三三	二六一	八
淡水街(同)	二三,〇一一	七九四	二一,八五〇	三六七	九
馬公街(澎湖廳)	二二,六三一	二,七〇六	一八,八七九	四六	〇
西螺街(臺南州)	二二,一七六	一六一	二〇,九一九	九六	一
北港街(同)	二一,〇三三	七六三	二〇,一一二	一五七	二
桃園街(新竹州)	二〇,七二〇	七九七	一九,八三七	八六	三

彰化街(臺中州) 二〇,五九五 一,二三四 一八,八三三 五三八 二四
 臺東街(臺東廳) 九六一九 一,八一九 七,三七七 四二三 二五
 花蓮港街(花蓮港廳) 九一八三 四,〇四三 四,五七七 五六三 二六
 本表には人口二萬以上の市及街のみを挙げ、且つ廳所在地たる臺東、花蓮港兩街を掲ぐ。

二 内地其の他の都市との人口比較

(大正十四年) (昭和二年末現在)
 (括弧内の数字は)
 (昭和二年末現在)

廣 臺 長 釜 濱 平 臺 靜 松 基

島 北 崎 山 松 壤 南 岡 本 隆

人口	一九五,七三一	一八九,〇七一	一〇六,七五九	九二,一五二	八九,一一四	八四,八四一	八四,七七二	六三,四二七	六二,二八五
	(二二一,六九六)	(一八九,八二三)				(八九,八二三)			(六九,九六〇)

福井 川田 雄山 島中 市津 畑竹 豐原(樺太) 日 新沼 四臺 福郡 高秋 仁川 福

朝鮮、樺太は同廳國勢調査速報に依る。
内地府縣は帝國統計年鑑に依る。

福井	五九九四三
川田	五六二九五
雄山	四三、八八五
島中	四三、七五二
市津	四二、九八四
畑竹	四一、三七九
豐原(樺太)	四一、二一五
日	四〇、五九三
新沼	三八、〇四二
四臺	三七、七七五
福郡	三七、七四八
高秋	二一、七八三
仁川	八、八七九
福	七、八二七

(四九、一七五)
(四六、二五五)
(四一、一四〇)
(九、六一九)
(九、一八三)

二二三 農業戸數

臺灣の農業戸數は四十萬戸にして、總戸數の約五割二分を占め、農業者一戸常平均耕地面積は二町(二甲強)に當る。
今之を内地其他と比較するに、總戸數に對する農業戸數の割合最も大なるは、朝鮮の七割七分にして、臺灣は第二位を占め、樺太は僅かに二割二分を以て最下位に在り。
農業者一戸常平均耕地面積の最も大なるは、北海道の四町五段にして、關東州の三町二段、樺太の二町四段之に亞き、臺灣は第四位を占め、内地府縣は一町歩を以て最下位に在り。

農業戸數

總戸數百に付農業戸數

農業戸數一戸當耕地面積町

臺灣	三九八、九〇三	五一・六	二・〇
朝鮮	二七八、三四八	七六・九	一・六
樺太	九九二・五	三三・四	二・四
關東州	五九、八〇七	三一・四	三・二
關東道	一七四、六八二	三六・二	四・五
北海道	五三八、九二六	四五・八	一・〇
内地府縣			

本表は昭和二年末の事實なり。
朝鮮、樺太、關東州(州内、鐵道附屬地)は同廳統計書に依る。
北海道、内地府縣は農林省統計表に依る。

二四 耕地面積

臺灣の耕地は總面積の二割餘を占め、其の面積は八十萬町歩(八十二萬甲)にして内、田三十九萬町歩(四十萬甲)畑四十一萬町歩(四十二萬甲)なり。
 今之を内地其の他と比較するに、總面積に對する耕地面積の割合最も大なるは、關東州の五割二分にして、臺灣は之に亞き、朝鮮の二割はその第三位を占む。耕地の内、田の割合畑より大なるは内地府縣のみにして、樺太の如きは全然田を有せず。

總數	耕地面積		百分比	
	田	畑	田	畑
臺灣	三九〇、三七〇	四一三、〇三一	四八・六	五一・四
朝鮮	一、五八七、〇五三	二、八〇〇、六七四	三六・二	六三・八
樺太	—	二四、〇九五	—	一〇〇・〇
關東州	一、六六〇	一九二、六三六	〇・九	九九・一
關東州	一、五八、九一四	六三〇、五一五	二〇・一	七九・九
北海道	二、九七二、五八五	二、三二八、一四一	五六・二	四三・八
内地府縣	五、二九〇、七二六	—	—	—
總數	八〇三、四〇一	—	—	—

内地府縣は農林省統計表に依る。
 本表は昭和二年末の事實なり。
 朝鮮、樺太、關東州(州内、鐵道附屬地)は同應統計書に依る。
 北海道、内地府縣は農林省統計表に依る。

二五 水利

臺灣に於ける埤圳の數は、七千二百四十にして内、水利組合百四、公共埤圳三、認定外埤圳七千百三十三なり。又其の灌漑排水面積は三十九萬甲にして内其の五割は水利組合の灌漑に屬す。

總數	埤圳數	灌漑排水面積	灌漑排水面積百分比
水利組合	7,240	390,767 ^甲	100.0
公共埤圳	104	195,773	50.1
認定外埤圳	3	110,514	28.3
	7,347	84,480	21.6

本表は昭和二年度末現在の事實なり。
本表の外工事施行中の組合一あり。

二六 農 産

臺灣の農産物は、昭和二年中の總生産價額二億三千三百萬圓にして内普通作物一億五千四百萬圓、特用作物五千八百萬圓、園藝作物二千二百萬圓なり。
 更に之を作物別に觀るに、米は一億三千萬圓を以て第一位を占め、甘蔗は四千六百萬圓を以て之に亞き、甘藷の二千百萬圓、蔬菜類の一千百萬圓、茶の六百五十萬圓、^{バナナ} 苧蕉の六百四十萬圓、落花生の二百六十萬圓、柑橘の百七十萬圓、豆類の百六十萬圓等順次之に亞く。

作物	生産價額	百分比例	作付面積	收穫高
總 普通作物	二,三三,五九,三五〇	100.0	甲	—
米(玄米)	一,五四,〇四,九八七	六六.〇	—	—
甘藷	一,三〇,七九,六五〇	五六.〇	六〇三,一五三	六八八,六七二石
豆類	二一,三七,八一三	九.二	二八,七一〇	二,二五,〇七九,二四五斤
小麥	一,五六,九,一六	〇.七	二,三,七一一	九〇,八一石
其他	四五,一二九	〇	五二四	二,六八七石
特用作物	二六一,四二九	〇.一	?	?
甘蔗	五七,八二八,〇四六	二.四	—	—
茶	四五,七二七,五八三	一九.六	九,九六九〇	七,四二〇,四八〇,九八七斤
蔗	六,五二七,二三〇	二.八	四三,二六八	一九,三一六,九二八斤

作物	生産價額	百分比例	作付面積	收穫高
落花生	二,五九七,一五三	一一.一	二七,一五〇	四七〇,一六四石
煙草	七七五,一三〇	〇.三	八四九	二,〇六八,〇五三斤
黃麻	七九三,五六三	〇.四	二,四〇五	六,〇八三,一九六斤
苧麻	五四八,七九一	〇.二	一,七三六	一,九三二,一九七斤
藍麻	二六七,五五二	〇.一	一,〇六八	一〇,八八九石
胡麻	九九,九五三	〇	—	—
藍花	二七九,四五二	〇.一	三〇七	一,五七三,二二斤
香花	一七三,四三三	〇.一	二八九	二,一九二,二〇四斤
苧花	三八,二〇七	〇	?	?
其他	二,一五九,七八三	九.二	—	—
園藝作物	六,四四〇,四一一	二.七	一四,九三四	二,三三九〇,四六〇斤
苧蕉	一,六五八,二一五	〇.七	三,一三二	二八,六〇四,七〇八斤
柑橘	七六四,九八四	〇.三	二,二二四	二四,三四七,七二四斤
龍眼	二〇九,六八九	〇.一	五三八	五,三三八,八三九斤
檳榔	九四〇,五八〇	〇.四	二,八六五	二〇,九二二,〇八五箇
鳳梨	一五九,九〇五	〇.一	五二五	五,一三九,九二七斤
椰子	一六九,〇四五	〇.一	三八〇	七,九三九,七六一斤
李	一一五,五〇,一一	〇.五	?	?
蔬菜	一一五,五〇,一一	〇.五	?	?
其他	一一五,五〇,一一	〇.五	?	?

二七 畜 産

臺灣の畜産物生産總價額は、昭和二年に三千九百萬圓を算し内家畜生産三千三百萬圓、家禽生産五百萬圓、牛乳三十五萬圓なり。
 家畜生産中、豚は三千萬圓を以て第一位を占め、水牛の二百萬圓之に亞く。家禽生産中第一位を占むるは鶏の四百萬圓なり。

家畜種類	生産價額 (円)	生産價額 百分比例
總額	三、八八七、三三二	100.0
水牛	三三、一七二、九六五	八五.四
黄牛	二、〇九八、九一九	五.四
其他の牛	六九五、一二二	一.八
豚	一九八、三五三	〇.五
山羊	二九、九二八、三二八	七七.〇
其他	二二八、六〇四	〇.六
鷺	二二、六五九	〇.一
鷓	五、三二〇、〇九三	一三七
鷓	四、一一六、〇一五	一〇.六
鷓	八六三、五二七	二.二

姜班薯簿蓮龍藤筍木薪竹用

芝 (竹) 眼

黃綿榔皮草肉 炭材類材類

	價額	百分比額
總	一四、〇七九、四三二	100.0
用材類	五、八二〇、五七二	四一.四
薪材類	三、六〇三、六二七	二五.六
木炭類	一、九四九、〇九二	一三.八
竹類	一、四九九、四一六	一〇.六
藤類	五七四、四四一	四.一
龍眼類	二二九、九一五	一.七
蓮類	一八〇、九九五	一.三
薯類	四八、一九二	〇.三
班類	三八、三〇五	〇.三
芝類	二八、五〇八	〇.二
榔類	二七、九九八	〇.二
綿類	二三、九七九	〇.二
黃類		

二八 林産

臺灣の林産物生産總價額は、昭和二年に一千四百萬圓を算し内用材の五百八十萬圓第一位を占め、竹材の三百六十萬圓、薪材の百九十萬圓、木炭の百五十萬圓等順次之に亞く。

牛 七 鷓
面 鳥
乳 鳥

三一九、九〇三
二〇、六五八
三五四、二七四

〇.八
〇.二
〇.九

製腦原料
其他

二三、二九八
一一、〇九三

〇・三
一・一

二九 鑛 産

臺灣の鑛産總價額は、昭和二年に二千百萬圓を算し内石炭は總價額の八割、即ち一千六百九十萬圓を以て第一位を占め、石油は百九十萬圓を以て之に亞き、金銅鑛の百二十七萬圓、金の六十萬圓等順次之に亞く。

品名	産額	價額	價百分比
石炭	一、八五七、二五七噸	二一、一〇一、六七四	100.0
石油	一、二八、九三二噸	一六、九三三、一七〇	80.2
金	一、五四、二七斤	六二〇、八〇八	2.9
銅	一、二六、五四一石	一七、一五〇〇	0.8
石	一、八、三六七、六二六貫	一、九三六、三七四	9.2
硫	一、四七五、八二七斤	一、二六九、七八六	6.0
銀	一、四九、九二〇匁	四九、〇一四	0.2
砂	二、九四八匁	二〇、二三五	0.1
天然揮發油	四、四二五石	一一、〇八八	0.1
其他		100、六九九	0.5

三〇 水産

臺灣の水産總價額は、昭和二年には一千七百九十萬圓を算し内水産漁獲物一千百萬圓、養殖場漁獲物三百九十萬圓、水産製造物二百五十萬圓、製鹽六十萬圓なり。
 更に之を品目別に觀れば、虱目魚サッパグレイの二百三十萬圓第一位を占め、鯖の二百萬圓、鯛の百八十萬圓、鯉節の百四十萬圓、鯉の百三十萬圓等順次之に亞く。

品名	價額	價額百分比
總 水産漁獲物 類	一七、八六九、六九四 円	100.0
鯛	一〇、八三三、二一九	六〇.六
鯉	一、八二九、七二七	一〇.三
鯉節	一、三三二、一一三	七.四
鯉	八四五、一一〇	四.七
鱈	六二五、三五六	三.五
鯖	二九七、七五四	一.七
鮪	一七六、四二七	一.〇
鯖	一〇、六〇〇、五二二	一.五
鯖	一七六、二一八	一.〇
鯖	二二六、三六二	一.二

製 其
鹽 他

三二九、九八一
六二一、六七三

一八
三五

鹽	鱈	鰻	鮓	蒲	煮	鯉	水	其	魷	烏	蚶	草	鱈	虱	養	其
魚	鱈	鮓	仔	ス	干	節	產	他	魚	魚	仔	魚	魚	魚	殖	他
				カ			製								場	
				ラ			造								漁	
				ス			物								獲	
															物	

二六、六四八	一一五、六三〇	七二、五六二	一七五、三二九	四一六、九七八	一、三六八、一八三	二、五〇五、三一一	一、五二、八五七	一八六、七七八	二二二、〇六六	四五〇、八七四	二九六、五八九	二七二、九六〇	二、三四九、四六七	三、九二〇、五九一	三、二七三、〇一〇
--------	---------	--------	---------	---------	-----------	-----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	-----------	-----------	-----------

〇・一	〇・七	〇・四	一・〇	二・三	七・七	一四・〇	〇・九	一・〇	一・二	二・五	一・七	一・五	一三・一	二二・九	一八・三
-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	------	------

三一 工業

臺灣の工業總生産價額は、昭和二年に二億一千四百萬圓を算し内砂糖の一億三千四百萬圓は群を抜いてその第一位を占め、再製茶の一千二百萬圓、木製品の四百八十萬圓、酒精の四百六十萬圓、調合肥料の三百七十萬圓、セメントの三百三十萬圓等順次之に亞く。

品名	生産價額 (円)	生産價額 百分比
總額	二,一四〇,七三六	100.0
砂糖	一,三〇〇,〇〇〇	六〇.七
酒精(稅拔)	四,五六三,四四〇	二.一
再製茶	一,一八四,九〇三	五.五
原動機及其他	二,二二七,三〇一	一.〇
屬機械類其他	四,八五七,七九一	二.三
木製品	三,二六九,二一〇	一.五
セメント	一,一八四,三八二	〇.六
染色類	二,八七五,九五九	一.三
麵類	二,四〇六,一四四	一.一
煉瓦(耐火共)	三,七三一,二三四	一.七
調合肥料		

金銀細工	二,〇七二,七八六	一.〇
味増及醬油	二,三八三,六九五	一.二
植物性油	一,八五二,一二七	〇.九
及同油柏		
敷瓦及屋根瓦	一,二二六,四四六	〇.六
金銀紙	一,五七一,五三二	〇.七
製粉	二,九四三,五四九	一.四
綿布、麻布類	一,二二六,八九六	〇.六
糖蜜(稅拔)	二,七五八,〇五二	一.三
帽子	一,九二六,二二七	〇.九
靴	一,三〇一,四八八	〇.六
製氷	一,二二五,五六二	〇.六
竹細工	一,五二五,一二七	〇.七
鳳梨罐	二,二二五,五二〇	一.〇
其他	一,八八七,六四四	〇.八

三二糖業

臺灣の糖業は昭和三年期に於て、公稱資本金二億九千百萬圓、作業工場數百五十九、作業能力四萬一千米噸を有し、其の製糖高九億六千七百萬斤に達す。就中新式製糖會社の數は十一にして作業工場數四十五、作業能力三萬九千九百噸を有し、その製糖高九億五千三百萬斤を算す。

總數	公稱資本金 千円	作業工場數	作業能力 米噸	製糖高 斤	製糖高 百分比
新式製糖會社	二九一,五三三	一五九	四一,〇八四	九六六,七五四,七九五	一〇〇〇
臺灣製糖	二八二,八六七	四五	三九,四三四	九五二,七六八,五七九	九八・五
新興製糖	六三,〇〇〇	一二	一〇,八一四	二三七,七八六,五五四	二四・六
明治製糖	一,一〇〇	一	五六〇	一〇,〇五七,〇〇〇	一・〇
大日本製糖	四八,〇〇〇	七	七,三三〇	一八七,九六六,〇五〇	一・九四
鹽水港製糖	五二,四一七	六	七,〇七八	一七九,五八九,七二〇	一・八六
新高製糖	五八,五〇〇	六	四,五三六	一一〇,八九四,五一五	一一・五
帝國製糖	二八,〇〇〇	三	三,二八四	六七,〇四一,九〇〇	六・九
昭和製糖	一八,〇〇〇	五	三,一三四	一一四,六二七,〇五〇	一一・九
臺東製糖	三,〇〇〇	二	一,三二〇	二一,二六四,三六〇	二・三
總計	一,七五〇	一	三九二	三,〇〇四,九三〇	三〇・三

製糖會社	公稱資本金 千円	作業工場數	作業能力 米噸	製糖高 斤	製糖高 百分比
新竹製糖	七,五〇〇	一	五六〇	四,〇四三,七〇〇	〇・四
沙轆製糖	二,五〇〇	一	三三六	六,五〇五,七〇〇	〇・七
改良糖廠	八,六六六	九	六〇〇	六,四七四,八五六	〇・七
舊式糖廠	?	一五	一,〇五〇	七,五一一,三六〇	〇・八

昭和三年期とは昭和二年十一月より同三年十月に至る期間を云ふ。

三三三 貿易

臺灣の貿易は之を外國貿易及内地貿易(臺灣内地間貿易)の二種に分つべきも、今之を總括すれば明治三十年の三千一百萬圓より大正元年の一億二千五百萬圓に進みたり。大正二、三の兩年は砂糖の減産と一般商況の不振に依り少しく減退したるも、大正五年には世界大戰の影響を受けて、一億七千七百萬圓に達し、大正六年には二億圓臺に上り、大正八年には更に三億圓臺を突破せり。然るに大正十年及同十一年には世界經濟界の不況に伴ひ再び二億七、八千萬圓に減退したりしも、大正十二年には復た三億圓臺に上り、昭和二年には四億三千萬圓に達し、人口一人當百二圓を算せり。

次に貿易總額に對する内外兩貿易の割合を觀るに、内地貿易は常に過半数を占め少きも七割、多きは七割八分に達す。

一 貿易總表

年	總額		指數	外國貿易		内地貿易		百分比例		
	千円	千円		千円	千円	外國貿易	内地貿易	平均	一人當	
大正元年	1,254,244	1,000	100	342,267	91,157	27.3	72.7	37.4	37.4	
同二年	1,242,498	91	91	309,966	83,282	27.1	72.9	33.4	33.4	
同三年	1,116,333	89	89	259,996	85,637	23.3	76.7	32.2	32.2	

二 外國貿易

年	總額	指數	輸出	輸入	輸入超過
年	千円		千円	千円	千円
同四年	1,190,333	103	1,008,111	219	370
同五年	1,777,370	141	1,307,287	265	50.5
同六年	2,234,691	187	1,733,376	261	65.9
同七年	2,433,576	194	1,766,627	275	68.0
同八年	3,321,536	265	2,321,781	300	91.6
同九年	3,887,022	310	2,931,622	246	105.8
同十年	2,863,933	228	2,221,418	223	76.3
同十一年	2,769,960	221	2,099,475	244	75.6
同十二年	3,087,724	246	2,400,460	221	77.9
同十三年	3,867,000	308	2,977,000	230	77.0
同十四年	4,496,100	358	3,451,155	222	76.8
昭和元年	4,348,838	347	3,233,515	256	74.4
同二年	4,336,255	346	3,233,187	255	74.5

大正元年
同二年
同三年

總額
指數
輸出
輸入
輸入超過

三四 對手國別外國貿易

臺灣の外國貿易は大體に於て輸入超過を示す。而して對手國中支那は累年主要の地位に在り。即ち輸出貿易總額に對する其の割合は少きも二割九分多きは六割を占め、輸入貿易に於ては少きも三割四分、多きは五割七分を占む。

今昭和二年の外國貿易に就て觀るに、貿易總額一億一千萬圓、内輸出額は四千五百萬圓にして、就中支那の二千五百萬圓最も多く、總額の五割六分に當り、香港の六百萬圓、北米合衆國の五百六十萬圓、蘭領印度の三百八十萬圓等順次之に亞く。輸入額は六千六百萬圓中第一位を占むるは支那の二千三百萬圓にして、總額の三割五分に當り、英領印度の一千五百萬圓、獨逸の六百八十萬圓、關東州の四百五十萬圓、英吉利の三百萬圓等順次之に亞く。

一 輸出

總額	昭和二年	同元年	大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同元年
千円	44,598	49,315	47,966	42,576	29,151	30,563	14,960
關東州	908	1,262	1,188	861	722	621	13
支那	24,791	29,760	26,347	22,154	10,526	10,300	4,164
香港	6,083	4,458	5,044	5,766	4,172	4,333	3,953
蘭領印度	3,788	4,022	4,005	3,540	3,189	3,294	3,111
暹羅	371	874	996	1,393	1,192	1,003	—

二 輸入

英領印度海峽植民地及英領ボルネオ	比律賓諸島	佛蘭西	獨逸	英吉利	北米合衆國	其他
千円	646	496	347	177	1,180	5,602
	579	375	234	133	966	410
	513	463	659	134	1,102	475
	322	601	809	224	1,168	490
	184	394	1,049	24	841	273
	210	431	342	185	1,033	1,121
	345	52	682	1,573	1,087	4,917
	—	—	—	—	4,917	1,613

總額	昭和二年	同元年	大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同元年
千円	65,840	62,008	56,489	46,424	39,111	36,922	19,307
關東州	4,531	2,033	2,105	1,063	3,708	3,063	1,258
支那	22,928	27,227	30,572	26,327	17,498	18,239	6,767
佛領印度支那	926	689	239	148	134	101	329
蘭領印度	2,884	4,110	3,448	3,033	5,013	3,501	307
暹羅	2,558	1,726	727	465	304	245	101
英領印度	15,165	10,573	3,853	2,706	1,496	1,137	2,173
海峽植民地及英領ボルネオ	499	429	238	268	144	93	56

濠太刺利	四七八	八〇五	五〇六	一、二七五	六二二	一八五	六三
波新	四八一	六八七	二二四	一、三四六	三九二	五六八	一、四三五
獨逸	六八〇三	五、五九六	一、七三二	六、七四	五二二	三一	一、〇七二
英吉利	三、〇七四	二、七〇五	五、三三二	二、八八五	一九五八	一、四六五	三、四九〇
北美合衆國	二、六九六	二、一〇一	二、二一八	三、五〇五	六、三七一	三、三〇一	一、七〇〇
英領アメリカ	三二〇	七九四	六九七	六七一	二九六	五三二	一
其他	二、五〇七	二、五四三	二、五七八	二、一五九	一、六四四	四、三七一	五五四

三五 支那、香港及南洋貿易

臺灣の外國貿易中臺灣と最も密接の關係を有する支那、香港及南洋との貿易を再檢するに、年に依り多少の相異あるも、大體に於て常に重要な地位を占む。即ち昭和二年に就て觀るに、輸出額は三千六百萬圓にして、輸出貿易總額の約八割一分を占め、輸入貿易は四千六百萬圓にして、輸入貿易總額の六割九分に當れり。

一 輸 出

總額	昭和二年	同元年	大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同元年
支那	三六、二〇六	四〇、二八一	三七、六〇八	三三、八六一	一九、七六一	一九、六九七	五、一四八
香港	二四、七九一	二九、七六〇	二六、三四七	二二、一五四	一〇、五二六	一〇、三〇〇	四、二六四
南洋	六〇、八三三	四、四五八	五〇、四四	五、七六六	四、一七二	四、三三三	三、九三
總額	五三、三三二	六、〇六三	六、二二七	五、九四一	五、〇六三	五、〇七四	四、九一

本表の南洋とは英領海峽植民地、英領ホルネオ、蘭領印度、比律賓、英領印度、佛領印度支那、暹羅及濠太刺利を謂ふ。以下同じ。

二 輸 入

總額	昭和二年	同元年	大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同元年
支那	四、五、五九〇	四、五、五九五	三、九、六九五	三、四、二〇六	二、四、四〇三	二、三、八四八	九、九四二
香港	三、三、九二八	二、七、二二七	三、〇、五七二	二、六、三七七	一、七、四九八	一、八、二二九	六、七、六七
南洋	三、三、九二八	二、七、二二七	三、〇、五七二	二、六、三七七	一、七、四九八	一、八、二二九	六、七、六七
總額	一一、二、四四六	一一、〇、三四九	一〇、九、九一三	一〇、七、二一〇	九、九、四〇〇	九、九、三〇〇	一七、一、五五九

三六 重要品別外國貿易

臺灣の外國貿易中輸出品の主要なるものは、茶、石炭、砂糖、樟腦、酒精等なり。今昭和二年に就て之を觀るに、茶は一千百六十萬圓を以て第一位を占め、石炭の六百萬圓、砂糖の二百六十萬圓、錫の二百萬圓、樟腦及酒精の各百九十萬圓等順次之に亞く。次に輸入品の主要なるものは、豆油粕、砂糖、米、杉材、硫酸アンモニウム、ガンニール、石油、大豆等にして、昭和二年には米の千五百萬圓第一位を占め、豆油粕の千二百萬圓、硫酸アンモニウムの八百七十萬圓、砂糖の三百六十萬圓、大豆及杉材の各二百六十萬圓、ガンニール錫の二百四十萬圓、石油の百四十萬圓等順次之に亞く。

一 輸 出

品名	昭和二年	同元年	大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同元年
茶	千円 二一、六四五	千円 二一、三四五	千円 二一、四七六	千円 一〇、五〇四	千円 一〇、〇〇八	千円 九、五五二	千円 六、六七四
砂糖	二、五五一	三、一七八	五、九〇二	六、〇一四	二、四〇〇	二、八三一	一、七二九
石炭	六、一七四	八、四三七	七、四四八	七、三〇五	五、六九五	五、七一九	一、一八
樟腦	一、八九五	一、九四九	三、六〇九	二、六三七	三、三〇五	四、四一八	四、五〇〇
鹽	一、六〇七	一、九三八	六、三九	一、七七三	一、〇〇一	三、三五	—
乾鰯	一、一〇八	五、六五	五、二〇	三、六〇	一、三四	八七	—
セメント	一、〇六四	一、六八九	一、二三九	七、九八	六、五二	一、一〇七	—

品名	昭和二年	同元年	大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同元年
苧麻	四九六	四九九	四九七	四五二	三六五	四〇六	三七九
酒	一、八五五	二、〇〇一	一、九八七	一、六二二	一、三〇〇	六五二	二四
錫	二、二七九	一、九二八	二、四六六	一、五八九	五三三	五四	四五

二 輸 入

品名	昭和二年	同元年	大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同元年
豆油粕	千円 二二、二九〇	千円 一三、七四四	千円 一六、七七八	千円 二二、六八四	千円 七、六五七	千円 七、八二二	千円 一、九一七
砂糖	三、五八〇	五、三〇四	四、五八五	三、八三八	四、四四五	六、〇九九	一、四八
阿片	八三七	九八七	二、八一七	一、三六九	一、五二一	一、六六九	三、〇九四
米	一、五四七	九、二七五	一、五三七	六、一四	二、六六	四、五〇	一、一五四
石油	一、三九五	一、一〇七	一、三〇八	一、四三四	一、三五九	一、三七四	七、五六
包豆	五九七	八九八	一、二三四	一、五一六	一、八八〇	一、六五九	四、九七
大杉材及杉板	二、六二二	三、一二八	三、三三五	二、九〇四	二、三五二	二、五七三	二、四六
小麥	二、五五九	二、二三七	一、五七七	二、二五六	一、八八七	一、八〇六	五、六四
硫酸アンモニウム(粗製)	九四四	一、〇〇五	九八八	一、四四七	九六八	三一九	—
ニウム(粗製)	八、六六七	六、八〇四	五、四五七	一、八二五	九一九	三二九	—
ガンニール錫(故共)	二、四二一	二、四八六	二、七九五	一、七六四	一九九	三二九	一〇〇

三七 重要品別内地貿易

臺灣の内地貿易中移出品の主要なるものは、砂糖、米、芭蕉實、樟腦及樟腦油、鳳梨罐詰、檜材、酒精、鹽類等なり。今昭和二年に就て之を觀るに、砂糖は九千六百萬圓を以て第一位を占め、米の六千八百萬圓、芭蕉實の八百六十萬圓、酒精の三百六十萬圓、鳳梨罐詰及樟腦及樟腦油の各三百萬圓、檜材及檜板の二百四十萬圓、切乾薯の二百萬圓、鹽類の百六十萬圓等順次之に亞く。

次に移入品の主要なるものは、綿織及絹織布、肥料、鐵、酒類、鹽類、杉材、紙、小麥粉等にして、昭和二年には綿織及絹織布の千五百萬圓第一位を占め、鐵の六百萬圓、紙及小麥粉の各三百萬圓、杉材及杉板の二百五十萬圓、麥酒の二百四十萬圓、鹽類の二百二十萬圓、紙巻煙草及錫の各二百萬圓等順次之に亞く。

一 移出

	昭和二年	同元年	大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同元年
砂糖	九六四三二 <small>千円</small>	九八、三七六 <small>千円</small>	一〇五、六五一 <small>千円</small>	一一九、九一一 <small>千円</small>	二二、八〇八 <small>千円</small>	八四、四六九 <small>千円</small>	二八、一三四 <small>千円</small>
米	六七八八六	六三、〇九二	七二、一一〇	四八、四八六	二二、六三七	一三、五八二	一〇、二五七
酒精	三、六一六	四、〇八一	三、八五五	三、〇四〇	三、〇〇五	一、七八七	一、五七九
樟腦及樟腦油	二、九六五	四、六五八	三、三八三	五、九九六	五、二二四	四、〇八〇	二、五七〇
芭蕉實	八、六一六	一〇、九〇〇	九、〇九六	一一、八一六	八、二八〇	六、八七六	三、三七
切乾薯	一、九七一	六、六〇〇	一、九二二	一、三六八	三、四二二	三、五八	三、六

杉材及杉板	二、四三二	二、二六四	一、三二五	二、五七	四九五	七八二	二、四〇九
紙巻煙草	二、〇八〇	二、一一四	一、七五四	一、六七九	一、四一〇	一、四七九	五、六〇
調合肥料	六七一	一、〇一五	一、六〇八	二、三八九	一、四四九	二、三六〇	—
カンニ一糞及	一、四八三	一、八〇七	二、七六四	一、六三七	五六二	二二八	二二五
黄麻	一、二九六	一、〇九五	一、五六六	一、三四六	一、〇五五	一、二三八	四八二
紙	二、九九〇	三、〇六六	三、四三三	二、三八八	二、一七一	二、二五七	八三八
小米	五九二	九七四	一、六八九二	二、四〇九	一、九七八	五、七二二	一、〇一八
小麥粉	二、九八四	三、四四〇	三、九三六	二、四八四	一、五五五	二、二一九	一、六九〇
綿絲	一、三一九	一、六四二	一、六七〇	八八二	八三六	七五九	一六六
毛織物	一、二二一	一、三四四	一、〇一九	六七九	五、二四	四二二	三、四七
メリヤス肌衣(各種)	一、七八七	一、五〇九	一、六六五	八四〇	七八八	五、一一	一、九四
砂糖	一、二二七	一、一九〇	九九〇	一、三二七	八〇八	六六二	一、二六
麥砂	一、二七九	一、〇四八	五〇八	三九〇	二五二	九〇六	二二

檜材及檜板	二、四〇六	二、六三三	二、三二六	一、三四五	二、五六九	一、四四五	五三
模造パナマ帽	一、〇八八	一、七八八	一、三九七	九一〇	四七三	九六三	—
食鹽	六〇二	九〇四	一、二四〇	一、六六九	一、〇〇七	九五〇	二、二七
鯉節	一、五七二	一、八一八	一、三三二	一、八九〇	一、八四二	一、八四五	二一九
石炭	一、四八四	一、四七三	一、九〇二	二、〇六五	一、八四二	一、七九〇	—
鳳梨罐詰	三、一四六	一、七五二	一、九一八	一、三五一	九二五	八六〇	二二
一一移入							
絹織及絹織布	昭和二年 千円 一、四、九四三	同元年 千円 一、九、八〇六	大正十四年 千円 一、五、七〇八	同十三年 千円 七、九一六	同十二年 千円 六、四七三	同十一年 千円 六、四二二	同元年 千円 五、〇一六
鐵	六、〇三三	六、二二四	六、一一九	四、八九七	四、〇六五	四、二六二	一、八八〇
清酒	一、六二八	一、六五七	一、九九九	一、九四四	一、七〇八	三、七六八	一、三五四
麥酒	二、三八三	二、三二一	一、八七二	一、五六一	一、六四三	一、四七七	四六八
錫	二、〇三二	二、七六五	三、五七四	一、九〇九	一、四九二	六三八	五八〇
過燐酸肥料	一、八二五	一、六四九	一、八〇七	一、三八七	七八〇	七六五	—
硫酸アンモニウム	一、一九一	一、五二三	二、八九一	二、八五四	一、六九八	二、〇三三	—
鹽	二、一〇三	二、一九六	二、二二四	二、四九三	一、四八七	一、九七七	一、八一八
乾鰯	一、〇七七	八三五	六二七	三八九	二二四	一四九	—
煎子	一、一五四	一、六一八	一、五四〇	一、二六六	一、二八〇	一、〇九三	六三三

四〇 專 賣

臺灣の專賣は現在阿片、食鹽、樟腦、煙草及酒の五種なるか、就中酒は大正十一年七月以降の實施さす。今最近十六年間に於ける賣渡價額を觀るに、大正元年度に千七百萬圓なりしものか、大正六年度には二千萬圓を超ゆるに至り、更に大正九年度には三千萬圓を突破したるも、翌大正十年度には經濟界の世界的不況に伴ひ、樟腦の如きは特に前年度の一千萬圓より五百萬圓に減退したる爲め、總額も二千五百萬圓に低下したりしか、大正十一年度には稍や景況を回復したるを、酒專賣實施の結果總額三千四百萬圓に達し、大正十二年度には四千萬圓を突破し、大正十四年度には四千五百萬圓に増加せり。

最近人造樟腦の需用旺盛となり是か對策上樟腦に關する事項は一般に公表せざる爲め、昭和元年度及同二年度の賣渡總價額には樟腦に關するものを控除せる爲め大正十四年度に比し著しく減額せるも、各種類別に之を觀れば阿片煙膏を除く外は概ね增收の趨勢に在り。

大正元年度	一七、〇九六、九二一	阿片煙膏	六、〇二七、八三八	食鹽	七四七、九三二
同 二年度	一六、四九七、五〇〇		五、八八六、四〇〇		八〇八、九二二
同 三年度	一六、三六一、八二二		五、六八三、八六四		八九六、四六九
同 四年度	一六、五一一、七三四		五、八〇〇、七二四		八七三、九七八
同 五年度	一九、五九七、九二二		六、五九〇、一五三		九五二、九三五
同 六年度	二一、〇三五、七〇一		六、九二四、三七七		一、一八〇、四六五

賣渡總價額

阿片煙膏

食鹽

同 七年度
同 八年度
同 九年度
同 十年度
同 十一年度
同 十二年度
同 十三年度
同 十四年度
昭和元年度
同 二年度

大正元年度
同 二年度
同 三年度
同 四年度
同 五年度
同 六年度
同 七年度
同 八年度

樟腦及樟腦油

煙草

酒

同 七年度	二一、六六二、三四五	七、五五二、二四五	一、〇九三、一〇五
同 八年度	二七、四二三、三六一	七、六一九、四二二	九七九、〇八五
同 九年度	三二、九七三、八三五	七、七〇八、二三五	九九七、七七八
同 十年度	二五、四四一、〇〇六	六、七七二、六一四	一、七三三、六七七
同 十一年度	三四、六五三、五六二	六、二八三、二七七	一、八一〇、三〇七
同 十二年度	四〇、二二七、一五五	五、六四〇、六六五	二、三八二、八三二
同 十三年度	四一、八一七、七九八	五、一八四、〇三六	二、八三八、二八一
同 十四年度	四五、二五六、五六七	四、九二一、六六八	二、四六五、六四九
昭和元年度	三四、九〇九、四四七	四、七二六、五七六	二、一七二、八七六
同 二年度	三六、三六八、〇五六	四、三七五、七七四	二、二二五、九四七
大正元年度	五、七九七、三〇七	四、五二三、八三四	100
同 二年度	五、〇八三、〇七九	四、七一九、一〇九	九六
同 三年度	五、二三二、〇五七	四、五四九、四三二	九六
同 四年度	五、一六八、七六三	四、六六八、二六九	九七
同 五年度	六、七三三、五八四	五、三一六、二四九	一一五
同 六年度	七、二一九、五一七	五、八一三、三四三	一二三
同 七年度	七、〇四〇、九九七	六、九七五、八九八	一三三
同 八年度	九、一一五、三二〇	九、七〇九、五五四	一六〇

同	九年度	一一、八四〇、一九〇	一一、四二七、五三二	—	一九三
同	十年度	五、二五六、七二六	一一、六五八、九九九	—	一四九
同	十一年度	九、二七二、九九七	一〇、七四六、二八九	六、五四〇、六九二	二〇三
同	十二年度	一三、三一九、九八五	一〇、七五五、一四四	八、一三三、五二九	二三五
同	十三年度	一一、〇七九、八七二	一一、〇三一、五七〇	一一、六七八、〇三九	二四五
同	十四年度	一一、〇七八、四二七	一一、四五六、一五四	一三、三三四、六六九	二六五
昭	和元年度	?	一四、〇〇四、五三六	一四、〇一五、四五九	二〇四
同	二年度	?	一四、九九五、六二五	一四、七八〇、七二〇	二二三

樟腦及樟腦油には副産物を含む。

四一 銀行

臺灣に於ける銀行は、昭和二年十二月末現在に依れば行數七（内日本勸業銀行及三十四銀行は支店）にして、島内に於ける支店及出張所數合計四十六、資本金七千三百萬圓、（拂込金六千二百萬圓）、準備金五十七萬圓、純益金三百萬圓、島内預り金一億一千萬圓、同貸出金二億四千萬圓なり。

總	支店	出張所	公稱	資本金	準備金	純益金	年末現在			
							島内預り金	島内貸出金		
臺灣銀行	四	六	千円	七三、一九八	千円	五七三	千円	二二、七四九	千円	二四五、八二七
日本勸業銀行	一	—	—	一五、〇〇〇	—	—	—	四四、九二三	—	一四七、八九七
華南銀行	—	—	—	三六、七九八	—	—	—	二、七五六	—	四〇、四三二
臺灣商工銀行	一	—	—	五、〇〇〇	三九	—	—	一、二二五	—	九九八〇
彰化銀行	一	—	—	一〇、〇〇〇	三五九	—	—	二七、三七五	—	二八、一九六
臺灣貯蓄銀行	一	—	—	四、八〇〇	一四八	—	—	一三、八五〇	—	一一、五二三
三十四銀行	—	—	—	一、〇〇〇	二七	—	—	六、一五七	—	一、一六八
臺灣支店	三	—	—	六〇〇	—	—	—	一、五四三	—	六、六三一

日本勸業銀行支店及三十四銀行支店の資本金は本島各支店に於ける元金を掲ぐ、但し勸業銀行支店元金は毎月末本店勘定の平均額なり。

四二物價

臺灣の物價は世界大戰の影響を受くること比較的少かりしも、戦局の進展に伴ひ、大正七年頃より著しき昂騰を示し、大正九年にはその絶頂に達したりしか、翌大正十年以降は稍や低落の趨勢に在りたるも、最近に至り少しく高率を示せり。即ち主要なる日常生活必需品の臺北市に於ける物價の最近十六箇年の指數はよくその趨勢を示せり。

大正	100	米	100	甘藷(赤)	100	麵(太)	100	醬油(内地)	100	牛肉(牛黃)	100	豚肉	100	木炭	100	薪	100
元年	100		100	95	100	95	100	100	100	92	100	105	100	100	100	100	
二年	93		93	82	93	93	100	100	100	89	93	93	101	103	101	101	
三年	76		76	73	76	76	100	100	100	84	79	79	88	101	88	92	
四年	58		58	73	58	58	100	100	100	91	79	79	88	101	88	92	
五年	45		45	66	45	45	100	100	100	91	79	79	88	101	88	92	
六年	49		49	66	49	49	100	100	100	91	79	79	88	101	88	92	
七年	136		136	92	136	136	100	100	100	91	79	79	88	101	88	92	
八年	179		179	92	179	179	100	100	100	91	79	79	88	101	88	92	
九年	161		161	92	161	161	100	100	100	91	79	79	88	101	88	92	
十年	133		133	92	133	133	100	100	100	91	79	79	88	101	88	92	
十一年	127		127	92	127	127	100	100	100	91	79	79	88	101	88	92	

同十二年	同十三年	同十四年	昭和元年	同二年
三〇	一四六	一六三	一五七	一三七
二二	一九二	二三〇	二二九	二六二
一三一	一四〇	一四七	一五二	一四四
一五一	一五一	一六六	一五四	一六九
二〇一	二〇三	二〇三	二二一	二〇五
一三六	一三五	一六六	一六八	一四八
二五七	二七四	二九三	二九二	三〇〇
二七二	二七八	二八三	二七五	二六二

四三 教 育

臺灣の教育は、大正十一年二月發布の臺灣教育令に依り、從來の方針を一變し、初等教育を除くの外は、悉く内地人共學の制を採るに至れり。昭和二年度に初等教育機關たる小學校及公學校の八百七十六校、児童二十四萬六千人、高等普通教育機關たる高等學校、中學校及高等女學校の二十三校、生徒九千四百人、師範學校は四校、生徒千五百人、實業教育機關たる實業補習學校、農林學校、工業學校、商業學校の三十三校、生徒三千人、專門教育機關たる醫學專門學校、高等農林學校、高等商業學校の四校、生徒八百人、私立各種學校十七校、生徒二千五百人、書房百三十七、生徒五千四百人あり。

次に初等教育機關を内地其の他と比較するに、人口千に對する小學校児童數は、北海道の百六十八人最も多く、關東州の百三人最も少く、我臺灣は百二十九人を以て、朝鮮、關東州の上に位す。又臺灣の公學校、朝鮮の官公私立普通學校、樺太の土人教育所及關東州の官立公學堂並公立普通學堂児童の人口千に對する割合は、樺太の百十五人最も多く、我臺灣は五十五人を以て之に亞き、朝鮮は僅かに二十三人を以て最下位に在り。

一 教育機關 (昭和二年度)

醫學專門學校	學校數	教員數	生徒又は児童數	教員一人に付生徒(児童)
高等農林學校	一	五	三三	四八
	一	五	三二	二四

高等商業學校	二	六〇	三六一	六〇
高等學校	一	四九	五四二	一一一
師範學校	四	一〇四	一五五四	一四九
中學校	一〇	二八	四、二四五	一九五
高等女學校	三	二二	四、六一〇	二〇〇
農林學校	二	二九	四三四	一五〇
工業學校	一	六一	六四二	一〇五
商業學校	二	四七	七九三	一六九
實業補習學校	二八	一一一	一、〇九九	九九
小學校	一三三	八二二	二七、四三三	三三八
公立學校	七四三	五、一八二	二九、一八二	三三八
私立各種學校	一七	二三四	二、四八八	四二三
書房	一三七	二二五	五、三七六	二五〇

學校(小、公學校は分教場を含む)は年度末現在、教員、生徒(兒童)は三月一日現在
なり。教員には兼務者を含む。

二 内地其の他との初等教育比較

小學校	校數	教員數	兒童數	一校平均兒童	教員一人に付兒童	人口千に付兒童
臺灣	一三三	八二二	二七、四三三	二〇六・三	三三・八	二八・九
朝鮮	四五九	一、八九四	五六、六七一	一二三・五	二九・九	一一・九
關東	一七四	八五五	三一、七四四	一八二・四	三七・一	一四・七三
北海道	五四	七三六	二四、二五〇	四四九・一	三三・九	一〇・二七
内地府縣	一、六二四	九、〇四七	四二四、四八三	二六一・四	四六・九	一六・七九
公學校	二三、八三五	一〇〇、八四七	八、七六四、〇七七	三六七・七	四三・六	一五・一一
臺灣	七四三	五、一八二	二九、一八二	二九五・〇	四二・三	五・四六
朝鮮	一、四七八	八、六四八	四三、二二二	二八五・七	四八・八	二・二七
關東	一三三	六八八	二五、九二九	一九六・四	三七・七	二・八五

公學校の朝鮮は官公立普通學校、樺太は土人教育所、關東州(州内)は官立公學堂及公立普通學堂の事實なり。
人口千に付兒童算出の基數は、小學校に在りては内地人のみを、公學校に在りては各其の本土人のみを以て算出す。

臺灣の兒童は昭和三年三月一日現在なり。
 朝鮮は昭和二年度末(兒童は昭和三年三月一日)現在にして同府統計書に依る。
 樺太は昭和二年度末現在にして同廳統計書に依る。
 關東州(州内、鐵道附屬地、領事館)は昭和二年末現在にして同廳統計書に依る。
 北海道、内地府縣は大正十四年度末(兒童は大正十五年三月一日)現在にして帝國統計年鑑に依る。

四四 衛生機關

臺灣には昭和二年末現在、官立十三、公立十六、私立八十、計百九の醫院と、一千百名の醫師と、四百五十名の醫生と、一千七十名の産婆を有す。醫師、醫生一人に對する人口は全島平均二千七百十人にして、その割合の最も少きは臺東廳の二千二百二十人、最も多きは澎湖廳の六千九百四十人なり。

總數	醫院			醫師及醫生		産婆	醫師醫生一人に付人口
	官立	公立	私立	總數	醫師		
澎湖廳	一	一	一	九	九	二	六九三八
花蓮港廳	一	一	八	二七	二七	一五	二四三一
臺東廳	一	一	一	二〇	二〇	四	二二三四
高雄州	二	三	六	二〇八	一七〇	三九	二六六九
臺南州	二	四	九	三六四	二八七	四一八	二九九五
臺中州	一	二	三	三三三	二二七	二二四	二九七一
新竹州	一	一	七	二五九	九三	五二	二四五四
臺北州	四	六	二七	三六八	二八九	二〇六	二三五五
總數	一三	一六	八〇	一五六八	一二二二	一〇七一	二七一一

醫生は明治三十四年府令第四十七號臺灣醫生免許規則に依り免許を得て其の管轄内に於て醫師を業と爲す者とす。

本表の外藥劑師百五名、齒科醫師百十七名を有す。

四五 水道

臺灣に於ける既設水道(簡易水道を含む)の總數はパロン、恒春、馬太鞍、カムテン等の給水戸數及消費水量不明のものを除き、昭和二年末に五十九箇所、年末現在給水戸數は專用栓戸數二萬九千八百七十戸、共用栓戸數二萬七千八百戸にして其の消費水量は消費水量不明の三十四水道を除き(臺東、花蓮港兩廳下に於ける水道の大多數は簡易水道にして其の消費水量は不明なり)計量供給千六百二十八萬立方米、放任供給千四百四十九萬立方米なり。

年末現在

年中消費水量(立方米)

總數	水道數		總數	計量供給	放任供給
	專用栓戸數	共用栓戸數			
臺北州	九	一七、四二五	三〇、七七四、九三三	一、六二八〇、五六六	一、四四九四、三六七
新竹州	二	九〇	一四、五二二、八四一	一、三、一〇一、六〇〇	一、四二一、四一
臺中州	九	四、九一八	二二、一〇三	八六九	二〇、一三三、四
臺南州	五	三、九〇五	四、七九八、八九四	三三八、六三七	四、四六〇、一五七
高雄州	四	二、七一〇	六、五五四、七四一	一、三五一、七二四	五、二〇三、〇一七
臺東廳	三	一、六五	四、二九一、三〇二	一、三、七、〇六二	二、九六四、二四〇
花蓮港廳	一	六五八	?	?	?
總數	五九	二七、八七一	五八六、〇五二	一、六、〇、六八四	四、二、五、三六八

花蓮港廳の年中消費水量は花蓮港水道のみの事實なり。
 本表の外パロン(新竹)恒春(高雄)馬太鞍(花蓮港)カムテン(臺東)等の水道あるも月
 數及消費水量等不明なり。

四六 ペストとマラリア

臺灣は一般に不健康地の如く解せらるゝも、衛生設備の完成と共に、近年其の面目を一
 新し、ペストの如き大正七年以來全く之れか發生を見ず。又マラリアの如きも其の死亡數
 は年に依りて増減ありと雖、一般に減退の傾向を示し、明治三十九年に於て人口千に付死
 亡數三人二分なりしものが、昭和二年には一人二分に減退し、其の實數に於ても同年間に
 五割二分を減したり。

年	死亡實數		指數		人口千に付死亡	
	ペスト	マラリア	ペスト	マラリア	ペスト	マラリア
明治三十九年	二、五三四	一〇、五六二	100	100	〇・七七	三・二一
同 四十年	二、四四八	一一、七二五	九七	一一一	〇・七九	三・七七
同 四十一年	一、〇六四	一一、七四〇	四二	一一一	〇・三四	三・七五
同 四十二年	八五四	一〇、三三三	三四	九八	〇・二七	三・二六
同 四十三年	二五	九、一〇四	一	八六	〇・〇一	二・九二
同 四十四年	三六一	七、九四九	一四	七五	〇・一一	二・四二
大正元年	一八七	六、九〇九	七	六五	〇・〇六	二・〇六
同 二年	二二三	六、五七二	五	六二	〇・〇四	一・九二
同 三年	四九四	八、八八五	一九	八四	〇・一四	二・五六
同 四年	六四	一三、三五〇	三	一二六	〇・〇二	三・八三

同	十二年	三九、四六三	三三、九六五	五、四九八	四五	二、三	三、九	〇、六
同	十三年	三六、六二七	三一、四九一	五、一三六	四二	二、二	三、六	〇、六
同	十四年	三三、七五五	二九、〇〇一	四、七五四	三九	一、七	二、八	〇、五
昭	和元年	三一、四三四	二六、九八三	四、四五一	三六	一、六	二、六	〇、五
同	二年	二九、〇四三	二四、九三二	四、一三一	三三	一、五	二、四	〇、四

本表は各年十二月末日現在にして本島人のみの事實なり。

四八 鐵 道

臺灣の鐵道は、昭和二年度末には官設鐵道（阿里山及羅東森林鐵道を含む）の營業哩數六百哩に達し、外に私設鐵道千三百哩を有す。私設鐵道は主として製糖會社の經營する所にして内營業線は三百哩なり。

今之を内地其他と比較するに、百方里に付鐵道營業線の哩數は、關東州の三百十三哩最も多く、我臺灣の七十六哩之に亞き、樺太の十二哩最も少し。更に人口萬に付哩數は樺太の十二哩最も多く、朝鮮は一哩にして最も少く、臺灣は二哩を以て内地の上に在り。

營業線路延長

	總數	官設	私設	百方里に付	人口萬に付
臺灣	九四八哩	六〇八哩	三四〇哩	七、六二	二、三
朝鮮	二、〇一六	一、四五七	五五九	一、四二	二、二
樺太	二七三	一五五	一一八	二、七	一、三
關東州	七五四	—	七五四	三、二七	六、八
内地道府縣	一一、三四五	八、〇〇八	三、三三七	四、五八	一、九

朝鮮、樺太、關東州は昭和二年度末現在にして同廳統計書に依る。
内地道府縣は昭和元年度末現在の開業線哩にして帝國統計年鑑に依る。

四九 郵便、電信、電話

臺灣に於ける郵便、電信、電話の現況を觀るに、昭和二年度に於て通常郵便は引受六千萬、配達七千三百萬、電信は發信百四十萬、著信百九十萬、爲替は振出二千九百萬圓、拂渡千六百萬圓、貯金は預入一千六百萬圓、拂戻一千二百萬圓、貯金現在一千二百萬圓、振替貯金口座受入九千三百萬圓、拂出九千三百萬圓、現在五十萬圓なり。又同年度末現在電話加入者數は一萬二千、年度中加入者發信通話度數は五千五百萬なり。

今之を内地其他と比較するに、人口十に對する割合は通常郵便引受、電報發信、爲替振出及貯金預入を通して最多數を示すは樺太にして、其の最少數は朝鮮なり。又人口千に付電話加入者數の最も多きは樺太、最も少きは朝鮮にして、同加入者一に付通話度數の最も多きは關東州、最も少きは内地道府縣なり。

一 郵便、電信、爲替、貯金及電話

通常郵便

引配
人口十に對する
受達

六〇、五二、六一四
七二、六二五、四一七

一四一・三

電信

發著
人口十に對する
信信

一四二・三、二三八
一四七六、〇九〇

三・三

電 話	振替貯金			貯 金		爲 替	
	現 座 人員 に 在 付	口 座 拂 受 入 出	口 座 受 入 出	預 入 入 入	現 在 入 入	預 入 入 入	振 入 入 入
年度末現在 加入者數	11,617	92,674,595圓	92,868,951圓	16,393,949圓	12,389,083圓	12,233,144圓	28,519,870圓
年度中 加入者數	54,679,763	51,657圓	51,657圓	1,385圓	1,385圓	1,385圓	16,004,707圓
加入人口に 付通話者數	27	54,679,763	51,657	1,385	1,385	1,385	671
加入人口に 付通話者數	4,707						

二 内地其他との比較 (昭和二年度)

内地其他との比較 (昭和二年度)	人口十に對する		電話	
	人口十に對する	人口十に對する	加入者數	加入者一に 付通話者數
朝鮮	141.3	3.3	27	4707
樺太	105.2	2.9	15	5132
關東州	95.67	2.9	15	5132
北地府	78.32	1.80	15	4433
北海道	79.36	1.06	92	4159
朝鮮	141.3	3.3	27	4707
樺太	105.2	2.9	15	5132
關東州	95.67	2.9	15	5132
北地府	78.32	1.80	15	4433
北海道	79.36	1.06	92	4159

朝鮮、樺太、關東州(州内、鐵道附屬地)は同廳統計書に依る。
 北海道、内地府縣の電報發信は昭和元年度、爲替振出、貯金預入は大正十四年度、電
 話は昭和元年度の事實にして帝國統計年鑑に依る。

五〇 警察官署及職員

臺灣の地方警察機關數は昭和二年末現在に依れば、州警務部五、廳警務課三、警察署六、郡警察課四十五、支廳九、派出所及駐在所千五百三十にして、同職員の數は警視十五人、警部及警部補四百九十人、巡查六千九百人なり。

今之を内地其他と比較するに、一方里に對する巡查の數は、關東州の十人最も多く、臺灣は三人を以て之に亞き、巡查一人に付人口は北海道の千二百八十人第一位を占め、朝鮮の千百十人、内地府縣の千九百人、樺太の七百人、臺灣の六百三十人、關東州の四百四十人等順次之に亞く。

内地府縣	北海道	關東州	樺太	朝鮮	臺灣	警察官署		職員		一方里に付人口	
						警察署	派出所及駐在所	警視	警部及警部補		
一、二二〇	六七	二五	三	二五〇	六〇	一、五三一	一五	四九〇	六、九〇三	三〇	六二八
—	—	—	—	—	—	二、四七二	五三	一、二〇九	一七、一八八	一一	一一三
—	—	—	—	—	—	八七	二	二九	三二六	〇・一	七〇〇
—	—	—	—	—	—	三九八	二	一四八	二、五八四	九九	四四四
—	—	—	—	—	—	八二八	一四	一八二	一、九八七	〇・三	一一八七
—	—	—	—	—	—	一七、九八七	二六五	四、四一七	五三、七〇八	二・八	一、〇九四

本表は昭和二年末現在なり。

本表巡查一人に付人口中臺灣の分は蕃地居住の蕃人を算入して算出す。
 臺灣の警察署には郡役所警察課及支廳を含む。
 關東州の民政支署は警察分署として掲上す。
 朝鮮、樺太、關東州(州内、鐵道附屬地、領事館)は同廳統計書に依る。
 北海道、内地府縣は警察統計報告に依る。

五一 最近十六年間の進歩

人	總		耕		農	畜	林
	内地	本島	蕃地	外國			
人口	三、四三、一七〇	四、三三、七〇〇	一、二二、七九三	八二、二二七	七二、二八二甲	三、四三、一七〇	三、四三、一七〇
人數	一、二二、七九三	四、〇〇、九二七	八六、八四〇	一七、九二九	三、四三、一七〇	一、二二、七九三	一、二二、七九三
内地	一、二二、七九三	四、〇〇、九二七	八六、八四〇	一七、九二九	三、四三、一七〇	一、二二、七九三	一、二二、七九三
本島	三、二一、三三二	三、九一、五二一	三、九一、五二一	三、九一、五二一	三、二一、三三二	三、二一、三三二	三、二一、三三二
蕃地	八二、二二七	八二、二二七	八二、二二七	八二、二二七	八二、二二七	八二、二二七	八二、二二七
外國	一七、九二九	一七、九二九	一七、九二九	一七、九二九	一七、九二九	一七、九二九	一七、九二九
農	七二、二八二甲	八二、四七三甲	八二、四七三甲	八二、四七三甲	七二、二八二甲	七二、二八二甲	七二、二八二甲
畜	三、四三、一七〇	三、四三、一七〇	三、四三、一七〇	三、四三、一七〇	三、四三、一七〇	三、四三、一七〇	三、四三、一七〇
林	三、四三、一七〇	三、四三、一七〇	三、四三、一七〇	三、四三、一七〇	三、四三、一七〇	三、四三、一七〇	三、四三、一七〇
產	二五、六六八、七二四圓	三三、八四七、三三二圓	三三、八四七、三三二圓	三三、八四七、三三二圓	二五、六六八、七二四圓	二五、六六八、七二四圓	二五、六六八、七二四圓
產	?	一四、〇七九、四二二圓	一四、〇七九、四二二圓	一四、〇七九、四二二圓	?	?	?
產	?	?	?	?	?	?	?

大正元年を百
 として
 の指數

八〇八哩

一、三七哩

一六四

私設鐵道線路延長

郵便、電信及電話

通常郵便引受通數

三〇,五七五,二二四

六〇,〇五二,六一四

一九六

電報發信通數

九〇,三六二

一四二,三三八

一五八

爲替振出金額

一四,三九七,〇四五圓

二八,五一九,八七〇圓

一九八

貯金預入金額

三,一九六,二四三圓

一六,三九三,九四九圓

五一三

年度末現在

三,七五八

一一,六一七

三〇九

電話

加入者

一七,六三四,六二〇

五四,六七九,七六三

三二〇

1. 凡在本行存款者
 均得享受本行
 之優待
 2. 凡在本行存款者
 均得享受本行
 之優待
 3. 凡在本行存款者
 均得享受本行
 之優待
 4. 凡在本行存款者
 均得享受本行
 之優待
 5. 凡在本行存款者
 均得享受本行
 之優待
 6. 凡在本行存款者
 均得享受本行
 之優待
 7. 凡在本行存款者
 均得享受本行
 之優待
 8. 凡在本行存款者
 均得享受本行
 之優待
 9. 凡在本行存款者
 均得享受本行
 之優待
 10. 凡在本行存款者
 均得享受本行
 之優待

昭和四年七月八日印刷
昭和四年七月十日發行

臺灣總督府

臺北市大和町三丁目二番地

印刷人 船橋寬一

臺北市大和町三丁目二番地

印刷所 臺北印刷株式會社

中華民國二十九年

九月九日

星期日

晴

